

F33-B13ウ



1200500764383

33

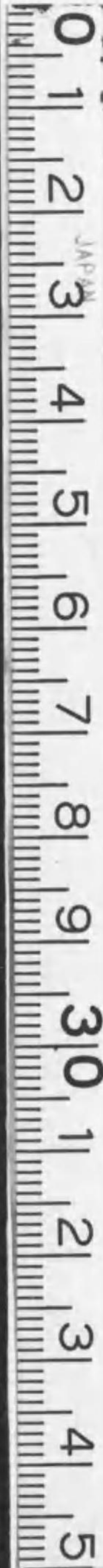
B13

ニュ・アトランチス

フランシス・ベイコン著
中橋一夫 譯

世界古典文庫
48

日本評論社



始



F 33
B 13

ニュ・アトランチス

フランシス・ベーコン著

中橋一夫譯



世界古典文庫

48

日本評論社



フランシス・ベイコン 像

Francis Bacon

New Atlantis



NEW
ATLANTIS

A Worke vnfinished.

Written by the Right Honourable, FRANCIS
Lord Verulam, Viscount St. Alban.



ニュー・アトランチス初版本の扉

譯者例言

翻譯にあつては Thomas Case 編 (The World Classics) と G. C. Moore Smith 編
のものを主とし、兩書に缺けていた箇所は Joseph Devey 編 (Bohn's Libraries) によつた。
解説と語義の解釋についてはスミス氏の序文とグロッサリーに負うところが大であつた。解
説は本文を一應讀んだ後でみられた方がよいかもされない。

目次

譯者例言	七
本文	二
註	八七
解說	九

ニュ・アトランチス

フランシス・ベイコン著

われわれは十二ヶ月分の食料品をつみこんで（まる一年間滞在していた）、ペルーから南海をへて支那、日本へむかつた。五ヶ月餘の間は微弱ではあつたが東の順風をうけていた。しかしそののち風はかわつて、幾日も西風がつづき、そのためほとんど進むこともできず、時には引きかえそうかとおもつたこともあつた。しかしふたたび強い東よりの南風がおこり、どうもがいても北へ北へと流されてしまつた。食料は節約にこれ努めていたのであるが、もうその頃にはすつかりなくなつてしまつた。こうして世界最大の大海原の真中に食料もなく投げだされたことに氣づく、身はもはやなきものと諦め、死の覺悟をした。だがわれわれは「淵＊にてその奇しき事跡＊を示したもうた」天なる神にわが心と祈りの聲とをささげて、元＊始＊に淵＊の面を吹きはらつて、乾ける土をもたらししたもうたごとくこの度もわれらに陸をあらわして、われらの破滅を救いくださるやうにと神の慈悲をこいねがつた。

こうするうち翌日の夕方ごろ前方二十哩ばかり北の方に厚い雲のようなものをみた。てつきり陸であろうと一抹の希望のわきあがるのを感じた。南海のこのあたりは全く未知の地域で、この世に知られない島々や大陸があるかもしれないとかねて聞いていたからである。そこでその夜は一晚中その陸らしいものの方へと針路をむけた。翌日の明け方ごろになつてそれが陸であることがはつきりとわかつた。見たところ平地で、一面の森におおわれ、そのためか一段と黒づんでみえた。一時間半ほど船をすすめて行くうちにわれわれは立派な港にはいつた。それは美しい都市の波止場であつた。この都市はさほど大きくはなかつたが、建物もすぐれ、海からみた眺めは心よかつた。陸にあがるまでは一刻千秋の思いで、岸に近づくと、ただちに上陸しようとした。しかしすぐに幾人かの人々が手に槍をもち、われわれの上陸を禁ずるかの態なのが眼についた。といつてもどなつたり、おどしたりするわけではなく、ただ身振りであれわれに立ちされとしましめるだけであつた。そこでわれわれも少なからず不愉快になり、どうしようかと仲間同志相談しはじめた。そうこうするうちに小さなボートがわれわれの方へ近づいてきた。それには八人ほどのつ

ていたが、その一人は兩はしを青く染めた黄色い籐の職杖を手にもつていた。その男は少しも狐疑逡巡するところなくわれわれの船にのりこんできた。仲間の一人がほかのものより少し前にでているのを見ると小さな羊皮紙（それはわれわれの羊皮紙よりもやや黄色をおび、書牌のように光澤があつたが、それと違つて柔らかく弾力があつた）の巻物を取りだし、それを前に立つている仲間にあたした。その巻物には古代ヘブライ語、古代ギリシヤ語、大學流の立派なラテン語およびスペイン語で次のような言葉が書かれてあつた。「一名の上陸も許さず。十六日以内にこの海岸を立去る用意をすべし。但しそれ以上の猶豫期日のあたえられたる場合はこの限りにあらず。その間、水、食料、病人の看護が必要であり、船の修繕を要するならば、その旨を記すべし。慈悲に屬するものをあたえるであろう」この巻物には天使の翼の印がしてあつたが、その翼はひろげられてはおらず、下の方にたれていて、その傍に十字架のしるしがあつた。これを渡すと役人は立ちさり、われわれの返事を受取るために一人の下僚をのこしていつた。

そこでわれわれは相談をしたが、當惑してしまつた。上陸を拒み、いそいで立ちされと警

告されたりしたので、われわれは甚だ心を痛めたが、また一方ではこの人々が言語をかたり、人情に厚いのをみては少なからず慰められた。特にその文書についていた十字架のしるしはわれわれには大きな喜びで、いわば何かよいことの前兆のようであつた。われわれはスペイン語で次のような返事を書いた。「わたしどもの船は無事です。あらしにあつたというよりは風と逆風とにあつたのですから。病人は大勢おり、甚だ重態です。上陸を許していただけませんとその命もあぶないでしょう」そのほかほしいものをこまごまと記して、「少々商品の貯えがありますから、その取引をさせていただけるならば、みなさんにご迷惑をかけずにわたくしどもの欲しいものを補給することもできましょう」と書きそえた。下僚にはピストル金貨の心づけを、かの役人には眞紅のビロード一反をおくろうとしたが、下僚はそれを取ろうともせず、ほとんど眼もくれないで、われわれのもとを立ちさり、迎えにきた別の小さなボートで引きかえした。

返事を出してから三時間ほどたつたころ顯官とおぼしい人がわれわれの方へきた。廣袖の寛衣をきていたが、それは綾織の吳縵のような生地で、われわれの吳縵よりはるかに光澤

のある、すぐれた群青色であつた。その下衣は緑色で帽子も緑で、上品なつくりのターバンの形であつたが、トルコのターバンのように大きくはなかつた。その帽子の縁から彼の髪の毛がふさふさとたれさがつていた。この人はみたところいかにも威厳ありげな人だつた。彼はところどころ鍍金したボートにつていたが、このボートには他に四人いるだけであつた。しかし約二十人ほどのせた別のボートがその後からついてきた。われわれの船から遠矢でとどくような距離にきたときに、海上において彼を迎えるよう誰かをよこせとの合圖をした。そこでわれわれはすぐにボートでおもだつた一人とこれに四人の者をつけて送つた。

六ヤードの距離に近づいたときに彼らはわれわれにそこに止まつて、それ以上は近よらぬようにと大聲で叫んだ。われわれは言われる通りにした。すると例の男は立ちあがつて、大聲にスペイン語で「あなた方はキリスト教徒ですか」とたずねた。十字架の印章をみていたので怖れるところなく「そうです」とこたえた。この答にかの男は右手を天にあげ、それをしずかに口もとに引きよせた（これは神に感謝するとき用いる身振りである）。それから「あなた方すべてが海賊でもなく、また過去四十日の間、合法的にせよ非合法にせよ、血を

流したことがないということをお誓いなさるならば、上陸の許可をあたえましょう」といつた。「喜んでその誓をいたします」とこたえると、彼についていた一人、書記とおもわれる者がこの嚴肅な誓を記録した。これがすむと同じボートにいた属従の一人に顯官はちよつと話しかけた。するとその属従は大聲で「閣下があなた方の船にのらないのは高慢のためでも威張っているためでもないことを知っていたいただきたいのことです。ただあなた方のご返事のなかで病人が大勢いるといつていられるので、市の保健官が近よらぬようにといましめられたのです」といつた。われわれは彼の方へ頭をさげ、「われわれはあなた様の卑しい僕でございます。これまでのご處置はわれわれへの大きな名譽とも類稀なご親切ともかんがえております。仲間のものの病氣も傳染病ではないとおもいます」とこたえた。かくて顯官は引きあげ、しばらくすると書記がわれわれの船にのつてきた。手にはその國の果物をもつていたが、それはオレンヂのようであつたが、色は黄色と眞紅との中間で、大變によい香をはなつていた。彼は傳染病の豫防薬としてこれを用いているらしかつた。「イエスの御名とその功德にかけて」といつた誓をわれわれにむかつてのべて、「明日朝六

時にみなさんを異人館（彼はこんな風な名でよんだ）にご案内します。そこには健康な方にもご病人にもいろいろと用意ができております」とかたつて、われわれのもとを去ろうとした。われわれが彼に數枚のピスル金貨をあたえようとする、笑つて「一つの勞働に二度の支拂いをうけてはなりません」といつた。（思うに）その職務にたいし國家から十分の俸給をえているという意味らしい。というのは（後にわかつたことなのだが）心づけをとる役人のことを「二重支拂い」と人々はいっているからである。

翌日の朝はやく、はじめに籐の職杖をもつてきたあの役人がまたやつてきて、「わたくしはみなさんを異人館にご案内するためにまいりました。このように早くまいりましたのも、まる一日をみなさんのご用に立てるためなのです。ともうしますのは、みなさんがわたくしの忠告をおいれくださいますならば、まずはじめにみなさんのうちからどなたか二三人がわたくしと一緒においでくださつて、その場所をみ、みなさんのご便宜なようにするにはどうしたらよいか、みていただきたくおもいますので。それからご病人やその他の方々をお迎えにやつて、上陸させるのがよろしいでしょう」といつた。われわれは彼に感謝の意を表して、

「よるべのない外國人にこのようにお世話くださつて、神さまのおむくいがございますよう」といつた。かくてわれわれのうち六人が彼とともに上陸した。上陸すると彼はわれわれの前に立つてあゆみ、あとを振りかえつて、「わたくしはみなさまの召使であり、案内人にすぎません」といつた。彼は三つの立派な街路を通つてわれわれを案内してくれた。行く途々、その兩側に人々は列をなして集まつた。しかし大變に靜かな態度であつて、じろじろと物珍らしげにみるようなことはせず、われわれを歓迎しようとしているかのようにあつた。われわれが傍を通ると、人々は兩腕を少しく外側にひろげたが、これは何か歓迎の意をしめすときの身振りであつた。

異人館は立派なひろびろとした煉瓦造りの屋敷で、その煉瓦はわれわれのものよりはやや青味をおびていた。きれいな窓があつたが、いくつかはガラス張りで、またあるものは油を塗つた白金巾といつたようなものであつた。彼ははじめは二階の立派な應接間へ案内し、そこで「總勢は何人で、病人は幾人ですか」とたずねた。「病人と丈夫なものとおあわせて總で五十一人、そのうち病人は十七人です」とこたえた。すると彼は、ちよつと失禮しますが、

お待ちくださいといつて去つた。一時間ばかりすると戻つてきて、用意した部屋をみせにわれわれをつれていつた。その部屋の數は十九で、そのうちの四つはほかの部屋よりも立派であつたが、それはわれわれの四人の頭立つた人々を迎へ、そこに一人づつ住わせる計畫のようであつた。のこりの十五にわれわれは二人づつ入ることになつていた。この部屋はみなきれいな、氣持のよい部屋で、造作も上品だつた。それから彼はわれわれを寄宿舍のような長い廊下につれていつた。そこは片側（というのは他の側は窓と壁だけであつた）にずらつと小房があり、それはきちんとした小房で、杉板で仕切りがしてあつた。この廊下と四十の小房（この數はわれわれの必要とする以上であつた）とは病人のための病院として建てられたものであつた。ご病人はよくなると、この小房から部屋の方へ移されるのですと彼はいつた。そのためすでにのべた數の部屋のほかになお空部屋十室が用意されていた。これがすむと彼はわれわれを應接間につれかえり、ちよつと杖をあげて（これは彼らが何か命令をするときの身振りである）「今日と明日とはみなさんを船からお移しするのにとつておいて、その後は三日間みなさんに室内に閉ぢこもつていただきます。この國の習慣でございますから。」

しかしなにもご心配になることはありませんし、窮窟だとおかんがえになる必要もございません。ただ平安と休息とに身をおまかせなさるよう。何一つご不自由はおかけしません。外に何かご用のおありのときは、わたくしたち六人のものがお世話をする命令をうけております」とかたつた。われわれは愛情と尊敬のかぎりをもつて彼に感謝し、「たしかに神さまはこの國にお姿をおあらわしになつていられるのでしよう」とかたつた。われわれは彼に二十枚のピストル金貨をあたえようとしたが、彼は笑つて、「何んですか、二重支拂いですね」というだけで、われわれのもとを去つた。

やがて食事となつた。それはパンといい、肉といい、非常に結構なごちそうで、わたしがヨーロッパで知つていゝかなる學寮の食事よりもすぐれたものであつた。われわれはまた健康によさそうな美味な三種類の飲みものをのんだ。一つは葡萄酒で、一つは穀類からつた酒で、われわれのビールのようにあつたが、もつと透明な色彩であつた。もう一つはこの國の果物からつくつたサイダーのようなもので、大變に心地よい爽快な飲みものであつた。そのほか澤山の眞紅のオレンジが病人のために出された。これは（彼らのいうところでは）

航海中にえた病にはよくきく薬であつた。また小さな灰色といおうか白みがかつた丸薬を一箱くれた。病人に毎晩ねる前に一粒づつのんでもらいたいというのであつた。これも（彼らのいうところでは）病人の回復をはやめるとのことである。

翌日、船から人々を移し、荷物をはこぶ面倒がどうやらかたつてほつとしたところで、わたくしは一同をよび集めるのがよいと考へた。一同が集まると、わたしはみなに次のようにかたつた。「みなさん、われわれ自身を知り、われわれがいかなるところにあるかを知らなければなりません。われわれは海中深くほうむられようとしたときに大魚の腹から吐きだされたヨナのように陸になげだされたのです。ただ今われわれは陸におりますけれども、死と生との間にいるにすぎません。というのはわれわれは舊世界にいてもなければ新世界にいてもないからです。ふたたびヨーロッパをみるようになるか否かは神さまだけのご存知です。われわれがここに来たのもいわば奇蹟ですが、ここから出るのも同じく奇蹟に相違ありません。それですから過去の救いと現在および未來の危険にかんがみてわれわれは神さまをあがめ銘々その行いを改めるようにいたしましょう。それにわれわれは神をうやま

い人情深いキリスト教徒の中にきたのです。この人たちの前にわれわれの不徳下劣な根性をみせて、つらよごしとなるようなことはしないようにしましょう。その上にこの人たちは（禮讓をつくしてはいましたが）命令によつて三日間われわれをこの邸内にとじこめました。われわれの行儀作法や性質がどういうものかをみるためでないのだれにわかりましょう。もしそれが悪いものとわかれば、ただちにわれわれを追放するでしょうし、もしよいものとわかればもつと猶豫をあたえてくれるでしょう。というのはつきそいとしてわれわれについている人々はまた同時にわれわれに監視の眼をむけるかもしれないからです。ですから、神さまの愛をうるために、われわれの魂と肉體との平安を愛するが故に、われわれは神さまといむつび、この國の人々の眼に好意のみられるように、われわれの行いをつつしみましよう」一同は聲をそろえてわたくしのこの結構な忠告に感謝し、眞面目に、禮儀正しく、不當の振舞いのないように暮すことを約束した。かくてわれわれは楽しく、なんの心配もなく、この三日間がすぎたらどうなるのであろうかと期待しつつ、日をおくつた。この間、うれしいことには病人は刻々とよくなつていつた。彼らはなにか治療の神聖な池にでも投げこまれ

たような氣がしていた。それほど自然に急速に回復していつたのである。

三日たつた翌朝、これまでにみたことのない新しい人がきた。この前の人と同じような青い服をつけていたが、そのターバンは眞白で、その頂に小さな赤い十字架がついていた。また立派なリンネルのケープをかけていた。はいつてくると、ちよつと挨拶をして、兩腕を外がわにひらいた。われわれの方でも低く丁寧に禮をかえした。この人から生か死の宣告をうけるとみただからである。彼はわれわれのうち少數のものと話したいといつた。そこで六人だけ残つて、あとはこの部屋から引きさがつた。すると彼はこんなふうにかたつた。「わたくしは官職はこの異人館の館長で、天職はキリスト教の僧侶です。それで外國人として、また主としてキリスト教徒としてのみなさんのご用をつとめるためにまいつた次第です。ちよつとお話したいことがございますが、みなさんも喜んでお聞きくださるとおもいます。わが國はみなさんに六週間この地にとどまる許可をあたえました。もつと餘裕がほしいとおつしやるならばご心配はいりません。その點、法律はそんなに嚴格ではありません。わたくしもみなさま方のためにご便宜なだけの時間をうるようにお世話することが必ずできるとお

もいます。それに異人館は現在財政豊かで、多くの蓄えもあることがおわかりになるでしょう。ともうしますのは、この三十七年の間、毎年の収入をたくわえておるのです。そんなに長い年月この地には外國の方がこれなかつたのです。ですからご心配はいりません。みなさま方がご滞在中は國家がその經費を支出いたします。それだからといつて一日でも早く引きあげようなどとお考えになる必要もございません。おもちになつた商品については、十分に面倒をみるつもりです。その報酬としては、商品でなり金銀いずれでなりともさしあげます。われわれにとつてはどちらでも同じですから。なおほかにお望みがございましたらば、おかくしくございますな。おわかりでしょうが、素氣ないご返事でみなさんの面目をおとすようなことはしないつもりです。ただ一つお話しておかなければならないことがございます。それは特別の許可をうけないでこの町の城壁から一カラン（これは一マイル半のことである）以上お出にならないということですよ」

この親切な親のようなあつかいに感嘆してわれわれはしばし顔を見あわせていたが「なんとももうしあげようありません。感謝をあらわす言葉もないのでございます。あなたさま

の氣高い寛大なお申出にもはやこれ以上お頼みすることは何一つございませぬ。まるで天國におけるわたくしどもの救いの有様を眼の前にみるようでございます。ほんの少し前には死の國にとらえられていたわたくしたちが今では心の慰みとなるものばかりのある處につれてこられたのでございます。ご命令の件については決してそれにそむくようなことはございませぬ。この幸福な神聖な土地の奥深く入りたいと心は燃えたつて抑えがたいのでございますけれども」とこたえ、なおつけ加えて「わたくしどものお祈りのうちに尊いあなたさまやこの國の方々を忘れるようなことがございましたら、その舌の根は上顎にくつついてしまうことでございますよ」といつた。また、この地上の人々を支配する正しい道理によつてわれわれを眞の召使としてご受納くださるようにといともうやうやくねがい、わが身もその所有する一切もあなたさまの脚もとに捧げたてまつりますといつた。「わたしは僧侶ですから、僧侶にふさわしい報酬をもとめるのみです。それは兄弟の愛とあなたの方の魂と肉體との平安です」と彼はのべた。かくて眼にはやさしみの涙をたたえて立ちさつた。あとにわれわれは喜びとその親切とに驚きまよふばかりで、「天使たちの國にきたのだ。その天使は日々にな

れわれの前にあらわれて、われわれの考えもしない、まして豫期もしない暖い心で求めもせぬうちからわれわれの望みをみたしてくださるのだ」とたがいにかたりあつた。

翌日十時頃、館長はふたたびきて、挨拶の後、「お邪魔にあがりましたよ」としたしげにかたつた。彼は椅子をもとめて、腰をおろし、われわれ十人のももの（他は卑しい身分のものか、それでなければ外出していた）も彼とともに腰をおろした。一同が席につくと、彼は次のようにかたりはじめた。「このペンサレムの國（彼らの言葉でそういう名であつた）のものについてもうしますと、わが國が世界から孤立した位置にあるため、また外國へ旅行する者にたいしては秘密をまもるべき法律があるため、それに外國人を入國させることもまれなために、われわれはこの世界の大部分をよく知っていますけれども、われわれのことは知られておりません。そこで一番知らない者が質問するのが適當なのですから、わたくしがあなた方に質問するよりはあなた方がわたくしに質問する方が一時のなぐさみとしても當然のこととおもいます」

「わたくしどもの方から質問することをお許しくださつてまことに感謝にたえません。これ

までの経験からみまして、この幸福な國の状態について知るほど價值あることはこの世にないと考えている次第なのでございます」とこたえ、「しかし特にわたくしどもはそれぞれ世界のはしからきて相い會したものでありますし、（ともにキリスト教徒なのですから）他日天國においてめぐりあうことも必らずあるとおもいますので、（この地上にあつてわたくしどもも救世主がお歩るきになつたわが國からかくも廣い未知の海をもつてへだてられ、かくも遠いところにお國のあることをおもひましても）わたくしどもはお國の使徒がどなたで、どういふふうキリスト教の信仰に改宗されたのか知りたいものです」とたずねた。この質問に非常に満足らしい様子をその顔にたたえて彼は「まず第一にそのような質問をなさるとは、わたくしの心はあなた方のお心と一つに結びつけられたともうすものでございます。といいますのは、あなた方が何よりも天國を求めていることがそれでわかるからです。喜んで簡単にみなさまのお求めに應じましょう」

「われらの救世主昇天後約二十年ほどしてレンフューザ（この島の東海岸にある都市です）の人々がある夜（それは曇つた靜かな夜でした）海上數哩の沖合とおぼしいあたりに大きな

光の柱をみました。先のとがった柱ではなく、圓柱か圓筒といった形で、海からはるか天へとそびえていました。そしてその頂上には圓柱よりも光り輝く大きな光の十字架がみえました。この不思議な光景に町の人々は急ぎ砂濱にあつまつて、いぶかり眺めていましたが、やがていくつかの小さなボートにのつてこの不思議な柱に近づこうとしました。しかしボートが圓柱から六十ヤードばかりのところに来ますと、金しぼりとなつて、それ以上すすむことができません。後に引き返えすならば動くこともできるのですけれど、近寄ることができないのです。それでボートはみな劇場の中のようにそれを中心にして立止まつたままこの天の奇蹟である光を眺めていました。偶然このボートの一つにサロモン學院の賢者が一人のりあわせていました。この學院といいますが學寮といいますが、これはこの王國の眼ともいうべきものなのです。その賢者はしばし注意深く熱心にこの圓柱と十字架とをみて考えていましたが、ひれ伏して、やがて膝まずき身をおこすと、両手を天にあげて、こんなお祈りをしました。

『天と地の大神、あなたさまの創造のわざとその秘密とを知り、(人間の發生にかんする

かぎり) 神聖なるみわざと自然のわざと人工のわざとあらゆる偽瞞や錯覺、これらを區別するためにあなたさまはわれらの仲間にその恩寵をたれさせたまいました。今わたくしどもの眼の前にあるものはあなたさまの指であり、まことの奇蹟であることをここにこの人々のまゝに認め證言いたしません。わたくしどもの書物によりますと、あなたさまは神聖な優れた目的のためにのみ奇蹟をおしめしになるとのことです(自然の法則はあなたさまご自身の法則であつて、大きな理由なくしてはその法則にそむくことはなさないのですから)。それでこの偉大な敵を富み榮えさせて、お慈悲をもつてその解釋と用途とをわたくしどもにおしめしくださることをやうやくしく乞ひ願ひあげます。このような奇蹟をわたくしどものところにお送りくださつて、そのようなお慈悲をおしめしくださる約束はある程度秘かにはたされていられるのですから』

このように祈りますとすぐにその乗つていたボートの呪縛がとけ動けるようになったのに気がつきました。ところがほかのボートはみな金しぼりになつたままなのです。それでこれ

は近づいてもよいという許しの證據とみて彼は靜かにゆつくりとボートを近づけるようにさせました。しかし近くにきましたときにその光の柱と十字架とは碎けて、空一面の星くずのように四方にとびちりました。その星くずもたちまち消えて、あとにはただ小さな箱舟がみえるばかりです。水の上に浮いているのに少しも濡れていない杉の箱です。そして賢者の方にむいていたその先には小さな青々とした棕櫚の枝が生えていました。賢者がその箱をうやうやしくボートにうつすと、箱はひとりでに開いて、中には一つの書物と書簡とがありました。いづれも立派な羊皮紙に書かれ、リンネルの布でつつんであります。書物にはあなた方がお持ちの（といいますのはあなた方の教會がもっているものをわたくしどもは知つているので申すのですが）それと同じ舊約および新約の全經典と黙示録とがのつていました。そのほか當時はまだ書かれていなかった新約の他の經典がすでにそこにはありました。それから書簡にはこんなことが書いてあります。

『いや高きものの下僕、イエス・キリストの使徒、余バーソロミユは、榮光の幻となつて余

にあらわれし天使により、この箱舟を海の波間にゆだねべしとの誠めをうけた。故にこの箱舟の漂着すべく神の定めたもうた處の國民くにたみに余は證言し、宣言する。その日汝らに父なる神、イエスより救いと平和と好意とが到るであらうと』

その上にこの書物と書簡との兩方に、あのはじめに異邦人の言語を語る力を使徒たちにあたえた奇蹟と同じような大きな奇蹟が行われたのでした。ともうしますのは、當時この島には原住民のほかにはヘブライ人、ベルシャ人、インド人などがいたのですが、みなこの書物と書簡とが自分たちの國の言葉で書かれているかのように讀むことができたのでした。このようにしてこの國は聖バーソロミユの使徒的な奇蹟的な福音の力で箱舟によつて（舊世界の殘物が洪水から救われたように）異端から救われたのです。こうかたつて彼はしばし息をやすめたが、その時に使いの者がきて、彼をよびだした。そういうわけでこの日の物語はこれで終りとなつた。

翌日食事のあとで件の館長がまたやつてきて、「昨日は突然よびだされまして失禮しまし

た」といい、「しかし今日はそのつぐないにこんなお話でお氣にめすならばしばしお邪魔しましょう」といつた。「わたくしどもはお話がとても楽しく面白くつて、お話をうけたまわっている間は過ぎさつた危険も来るべき恐怖も忘れるほどです。あなたさまとすこす一時は以前の生活の數年間の値うちがあるような氣がいたします」とこたえた。彼はちよつと頭をさげて、また席につくと「さあ、ご質問はあなたの方から」といつた。

仲間の一人はしばしたためらつたあとで「一つ知りたいことがあるのですけれど、あまりに厚かましくはないかとおたずねするのはばかつている次第です。でも、あなたさまの珍らしいまでのご親切にあまえて、思いきつておたずねいたしましたしょう。(あなたさまのご親切にはわたくしどもも自ら外國人とも思わず、あなたさまの誓を立てた公然の召使とも思つてゐるわけなのです)もし答える筋合でないとお考えでしたらおことわりくださつて、その失禮をどうかお許しくださいませ」かくてわれわれはいつた。「わたくしどもは昨日あなたさまがお話しになつた言葉をよく考えてみました。今わたくしどももこの幸福な國は世に知られておらず、しかも世界の大部分の國のことを知つてゐるというお話です。この國の方

々がヨーロッパの言葉を知り、わたくしどもの政府や商賣のこともよくご存知なのに、ヨーロッパのわたくしどもは(最近はずいところまで航海もし發見もしているのですが)この島のことについては僅かなりとも耳にしたこともないのを考えましても、そのお話は本當のこととおもいます。これがわたくしどもにはとても不思議なのです。すべて國民は外國に航海するか、外國人を迎えるかすることによつてたがいに知識をもつようになるものです。外國に旅行する者の方が國にとどまつていて外國人の話をきくよりも自らの眼でみるだけに多くの知識をうるものでありますが、いずれにせよこの二つの方法はそれぞれにある程度相互の知識をうるためには十分な方法であります。ところがこの島については、その船がヨーロッパの岸邊やそのほか東西兩印度にさえ到着したのをみたといつた話は聞いたこともありません。んし、世界のどこかの船がこの島から歸つてきたことも聞いたことはありません。しかし不思議はそんなところにあるのではないのです。(閣下もおつしやるとおり)このような大海の密室とでもいうところにこの島があることがその原因かもしれないからです。しかしこの國の人々が遠くはなれた國の人々の言葉や書物や事情について知つてゐるということがわ

たくしどもにはどうも腑におちないのです。他人には隠れていてみえず、しかも自分には他人がはつきりと光のなかにいるようにみえるということは神わざのようにわたくしどもには思われるのです」

こう語ると館長は愛嬌のある笑いをたたえて「今おたずねのようなご質問をなさるに、わたくしどもの許しをお求めになられたのは結構なことともいえましよう。まるであなた方はこの島が空とぶ精霊を四方にはなつてほかの國々の情報をあつめさせている魔法使の國だとお考えのようですから」といつた。そこでわれわれはみな大いに恐縮はしたが、なにもかも百も承知だといつたり顔をして、「閣下のお言葉は冗談にすぎないとおもいます。だがこの島には何か超自然なものがあるとわたくしどもは考えたい氣持になつています。しかしそれは魔法使というよりは天使のもつ超自然です。閣下にも本當に知つていただきたいのですが、なぜわれわれが不思議におもつて、こういう質問をするかともうしますと、それは今いつたような考えからではなく、閣下の以前のお話はこの島には外國人について秘密を守るべき法律があると匂わされたのをわたくしどもは憶えているからです」とこたえた。これに

たいし彼は「よく憶えていらつしやいますね。そういうわけで、あなた方にお話しすることにもあるこまかい點には觸れることができないのでございます。それを洩らすことは法律に反します。しかしそれでもあなた方にご満足をあたえるぐらいのお話は十分にありますよ」といつた。

「(とても信じられないとあなた方はお思いになるかもしれませんが)是非ともわかつていただきたいことがございます。それは約三千年前には世界の航海術(特に遠洋航海術)は今日よりも發達していたということなのです。もちろんこの百年餘の間にあなた方のお國でも航海術が發達したことはわたくしも知らないわけではございません。それはよく存じております。それでも當時の方が今日よりも進んでいたとわたくしはもうしあげたいのです。當時の人類はあの箱舟によつて大洪水から救われたばかりの人々なので、その箱舟の例から海上にのりだす自信があたえられたのではないでしようか、どうでしよう、いずれにせよ、當時航海術が發達していたことは本當なのです。フェニキア人、特にチルの人々は大船隊をもつていましたし、カルタゴ人は植民地をもつていました。その植民地は今日でもはるか西方に

のこつております。エジプトやパレスチナの船も遠く東洋にまでも出ていきました。また支那や（あなた方がアメリカといつている）大アトランチスには今ではジャンクと丸木舟が漂うだけですが、當時は大きな船が澤山にありました。この島には（當時の記録に明かな通り）千五百隻の頑丈な大型の船がありました。こういうことについてはあなた方のお國には記録がほとんどないのですが、わたくしどもの方にはそれについて多くの知識がございます。

その頃この島は世に知られていて、さつきいつたような國々の船がしばしばこの島をおとずれました。それで（當然のことですが）この國の人々は船乗りではなく、船乗りと一緒にくる外國の人々をしばしば迎えたのです。ベルシャ人とかカルデア人とかアラビア人とかいう人々です。それでほとんどすべての強大な名聲あまねき國々の民がこの島にきたわけです。そのあるものの子孫は今日でもわれわれの中にもこつています。ところでわれわれの船はどうかといえますと、それもさまざま航海にできました。あなた方が*ハーキュリーズの柱といつている海峡や大西洋、地中海の他の港にもいきましたし、東洋のバギン（これは*キャンバリンのことです）それから*クインツィなどにもいきましたし、遠く東羅韜のはてまで

もいつたのです。

丁度そのころから百年ぐらい後まで大アトランチスの住民は富み榮えていました。そこへ*ネプチューンの子孫が植民したとか、そこには壮大な寺院、宮殿、都會、丘陵があり、（その敷地や寺院を鎖のようにかこむ）舟の通れる立派な河の流が無数にあるとか、そこに登るための*「天の梯」^{はしたて}とでもいふべき幾段かの階段があるとか、そんなことをあなた方のあるすぐれた人が書いていますが、そういう記述がみな詩的創造の空想的なものであるにせよ、このアトランチスの國は、コヤと當時よばれていたペルーもチランベルといわれていたメキシコも軍備、海運、財政において強大な誇り高い王國であつたことはたしかです。一時は（少くとも十年ぐらいは）非常に強大な國だつたので、この二國とも大きな遠征をやつていきます。チランベルは大西洋をへて地中海にまでゆき、コヤは南海をへて、このわれわれの島にきました。この地中海へいつた國の遠征については、あなた方のところのその同じ作者がエジプトの坊さんから聞いたらしく、その言葉を引いています。それはたしかにあつたことなのです。しかしこの遠征軍に反抗し、これを撃破する光榮をになつたのがあの古代のアテ

ネ人であつたかどうか、わたくしにはわかりません。だがこの航海からは一隻の船も一人の人も歸つてこなかつたことは事實です。われわれの方に来たコヤの遠征軍も、われわれのような慈悲深い敵に出會つたのでなかつたならば、チランベルと同じような運命にあつたことでしょう。ともうしますのは、この島の王様、名はアルタピンという賢人でしかも軍略家ででしたが、この王様はおのが力と敵の力をよく知り、上陸軍をその船から蹠断して、彼らよりも強力な軍隊で海陸両方面からその海軍と陣營をかこんで、戦わずして降服させてしまいました。ところが敵を虜にしようとして、二度と双方向のようなことはしないという誓を立てさせるだけで満足して、彼らを安全に赦してやりました。

しかし神の復讐はこの高慢な遠征後いくばくもなく襲いかかりました。百年たらずのうち、この大アトランチスは全く消失し亡びてしまつたのです。それはあなた方のところのその偉大な人がいつているような地震のためではありません。(このあたりは地震のほとんどないところなので) そうではなくこの地方を襲つた洪水のためだつたのです。當時これらの國には舊世界のどこよりも遙かに大きな河や高い山があつて水を注ぎおとしていたので

した。しかしこの洪水は深くはなく、大抵のところは地上四十呎たらずでした。それで大體人間や動物は亡びましたが、少數の野蠻な森の住民はたすかりましたし、鳥も高い木や森にとんでいつて救われました。人間といえますれば、水の深さよりも高い建物があちこちに澤山あつたのですが、この洪水は浅くとも長い間つづきましたので溺死をまぬがれた谷の住民も食物やそのほか必需品の缺乏のために死んでしまつたのです。

それでアメリカの人口の稀薄なことやその住民の粗野で無智なこととも不思議ではございませぬ。アメリカの住民が若い民族であることを考えにいれなければなりません。少くとも世界の他の民族よりも一千年は若いのです。それぐらいの期間があつたのノアの大洪水とこの地方を襲つた洪水との間にはあつたのです。この山々に残つたあわれな人の子たちはその後徐々にすこしづつ全國土にひろまつてゆきました。(地球の中樞となつた一族であるノアとその子たちとは違つて) 單純な野蠻人でしたから、その子孫に文字や技術や禮儀作法をのこすことができなかつた。それに山に住んでいて(その地方が非常に寒いものですから) その邊でとれる虎や熊や毛の多い山羊の皮をきる習慣がつき、谷間におりてきて、そのた

えがたい暑さに気づいたときにも輕装をするすべをしらず、おのずと裸であるく習慣をはじめ、今日におよんでいます。ただ彼らは鳥の羽根に非常な誇りと喜びとを感じております。これも山にいたその祖先が地上は一面の洪水なのに地面高くとぶ鳥の限りない飛翔に心ひかれたことからでているのです。かくておわかりのように、この大きな偶然のできごとのためにわれわれとアメリカとの交通はたえてしまいました。ほかの國々よりもわれわれに最も近いところにあるため、われわれと最もよく通商の行われていた國だつたのですが。

世界のその他の土地についてもうしますとこれにつづく年月のうちに（戦争のためでしょうか、それとも自然な時の變化のためでしょうか）航海術はどこでも大變に衰えました。とくに遠洋航海は（主としてガリー船の使用と大洋にはほとんどたえられないような船の使用のために）まつたくかえりみられず忘れられてしまいました。そこでほかの國々との交際もほかの國からわが國をおとずれるという方面は、あなた方のようなまれにおこる偶然の場合をのぞいては既に長いことたえている次第がおわかりになつたでしょう。ところでわれわれの方からほかの國に航海することがたえた原因をみなさんにお話しなければなりません。本

當のことをいいますと、わが國の海運はその數、力、水夫、水先案内のほか航海に必要なすべての點であいかわらずすぐれていることをもうしあげなければならぬからです。それではなせわれわれが本國にとどまつているかをとくとり出してみなさんに説明いたしましょう。これはみなさんの主要なご質問の中心に近づくことになり、みなさんのご満足をえられることとおもいます。

千九百年ばかり以前にこの島にある王様が君臨していらつしやいました。その思い出をわれわれは特に崇拜していますが、それは迷信としてではなく、人間なのですが神的存在として崇拜しているのです。そのお名前は *ソラモーナともうされ、わたくしどもはこの國の法律制定者としてあげています。この王様は實に *はかりしれないほどに寛大なみ心をもつていらつしやつて、この王國と國民とを幸福にしようともみ心をそそいでいらつしやいました。そこで王様はこの國が外國の援助がまつたなくとも自立するに十分であり、その力のあることをお考えになりました。この島は周圍五千六百哩あり、その大部分はまれにみる豊かな土地だからです。それにこの國の船舶も漁業や港から港への輸送や近くにあつてこの國

の王權と法律の下にある小さな島々に航海することなどで十分に使いみちのあることにもお氣づきになられ、また當時この國は幸福に繁榮していて、これからは悪くするならば別のこともうこれ以上よくする方法もないことに思いたされました。かくて（人間の智慧の見とおしうるかぎりでは）その當時立派にできあがつているものに永久性をあたえるよりほかにはその氣高い英雄的なご事業に不足な點は何一つないことをお考えになりました。そこでこの王國のさまざまな基本法のうちに外國人の入國に關して今日わたくしどものもつていようなご禁令をおさだめになつたのです。當時は（アメリカの災害のあとで）外國人の來訪がしばしばあり、新奇をもとめて風俗習慣の混合されることをご心配になられたからです。許可のない外國人の入國を禁ずる同様な法律は支那王國でも古來からの法律で、今日でも施行されていることは事實であります。しかし支那ではそれは貧弱な法律で、彼らを奇妙な無智の臆病な愚かな國民にしてしまいました。だがわたくしどもの法律をお定めになつたお方はこの法律にこれとは別な性格をあたえられました。まず第一に、困窮せる外國人の救済のための方法を講じ、準備をされて、あらゆる點、人情を失わないようにされました。あなた方

はそのご恩恵にあずかられたわけです」

この言葉に（當然のことであるが）われわれ一同は立ち上つて、會釋した。彼は言葉をつづけて、

「その王様はまた人情と政策とを一致させようとお望みになつて、意志に反して外國人をとどめておくことは人情に反するし、また彼らが歸國して、この國の知識を洩らすことは政策に反するとお考えになつて、上陸を許された外國人のうち歸りたいものは（いつでも）歸られるようにし、とどまりたいものは國家から相當の資産と生活手段とがあたえられるような規定をもうけられました。この點、王様のご達見はおそれ多い次第で、ご禁制施行以來幾百年をへた今日まで一隻の船の歸國したという話をきいたおぼえがございません。ただわが國の船に乗つて歸ることを望んだものが前後十三人いただけです。これらの歸國した人たちが外國でどういふ報告をしたのかわたくしは知りません。しかしどんなことをいおうとどこでも單に夢とのみ思われたこととみなければなりません。さてこちらから外國へ行くことにつきましてはわれわれの立法者はこれを全部制限するのが適當とお考えになりました。これ

は支那と違つております。ともうしますのは支那人はどこでもすきなところへ航海できるからです。これからみましても支那の外國人排斥の法律は臆病と恐怖からの法律であることがわかります。しかしわれわれのこの制限には一つの立派な例外がございます。それは外國人との交通によつてえられる利益を保ち、弊害を避けるものなのです。このことについてみなさんにお話ししましょう。ここで少々わきみちにされるようにみえますが、やがてそれが適切なこともおわかりになるでしょう。

この王様のすぐれたご事業のうちで特にひいでたご事業が一つございます。それは「サロモン學院」とよぶ教團といいますが、そういうものの建設でございます。地上にかつてみざる高貴な施設で、この王國の燈ともわたくしどもは考えております。それは神さまのお仕事とその被造物との研究にささげられております。ある人はそれはソラモナ學院とあるべきで、創設者の名前を少しくなまつたものと考えています。しかし記録によれば今お話ししたような名前なのです。それであなた方のお國で有名なあのヘブライの王様のお名前にちなんでつけたものとわたくしは考えています。この王様をわたくしどもも全く

知らないわけではないのでございます。その王様のご著述であなた方のところではなくなつてしまつたものが二三わたくしどものところにはあるからでございます。それは「レバノンの香柏より牆にいずる苔にいたるすべての植物、生命あり動きあるすべてに関する博物學の著述でございます。これから考えますと、わたくしどもの王様は（ご自分より幾年も昔に生存していた）このヘブライの王様に多くの點で一致するところのあるのにお氣づきになつて、この施設の名稱をもつて王をたたえられたのでしよう。わたくしはどうか以上のような見解にかたむいております。古い記録に、この教團といいますが學會はサロモン學院といわれるとともに時には「六日間御行蹟の學寮」ともいわれております。これによつてわが英邁な王様は神が世界とそこにあるすべてを六日間で創造になつたことをヘブライ人から學んだものと信じます。そこで王様はあらゆるもの（それを造ることによつて神はその榮光をいやまし、それを用うることによつて人間はその實を一段と豊かにする）森羅萬象の眞の性質を探求するために學院を立てられて、これに第二のような名もつけられたのでございましょう。

ですが、ここで本論にもどることにしましょう。王様が全國民に王權の下にない諸國へ航海することを禁ぜられたときに次のようなご規定をもうけられました。すなわちそれぞれ航海をするように命をうけた二隻の船をこの王國から十二年ごとに出發させ、そのおののにサロモン學院の三人の特待生か會員の使節をのせるのです。その使命は派遣された國々の政情や物情、とくに全世界の科學、藝術、工業、發明に關する知識をわたくしどもにあたえ、その上にあらゆる種類の書物、什器、模型をもつてくることにあります。船は會員を上陸させるに戻り、會員たちは新しい使節がくるまで外國にとどまります。こういう規則でした。そしてこの船には食糧の貯藏と相當の量の寶物類とのほかは何ものせません。この寶物は會員が適當と考えた品物をかい、適當と考えた人々に報酬をあたえるのにあてるためのこして行くのであります。さて一般の水夫たちがどういふふうにして陸上でその本性を見あらわされないようにするのか、しばし上陸している連中がどのようにして他國人の名前で身をかかすのか、航海はどの方面に向うのか、新しい使節と落ちあう場所はどこなのか、その他同じような實際上のこまかい點について述べることはわたくしには許されていませんし、またあ

なた方のご希望にそうわけでもありません。しかしこれでみなさんにもおわかりでしょう。わたくしどもは金銀、寶石、絹、香料、その他の物質のために交易をするのではなく、ただ神さまが最初におつくりになつた光をうるために交易するのです。全世界のあらゆるところに生みだされた光をうるためなのです。

こういふふうにいふと彼は口をつぐんだ。われわれもみな黙りこくつていたが、それはかくも不思議なことがかくも眞實らしく語られるのを聞いて啞然としてしまつたからなのである。われわれが何かいたげで、いいたさずにいるのをみると彼は非常にいんぎんな態度で救いの手をさしのべ、われわれの航海のことや運命の浮沈について鄭重な質問をした。そして結論としてどのくらいの滞在期間を國家に求めたいのかお互に相談しておくがよいといひ、遠慮する必要はない、希望だけの期間はえられるよう斡旋するからといつた。そこでわれわれはみな立ち上つて、彼の外套の裾に接吻しようとしたが、彼はそうさせないで、われわれのもとを辭した。しかしここにとどまろうとする外國人には國家が資産を提供する習慣であるとのことが仲間の連中に知れわたると、人をやつて船の見張りをさせ、みながすぐに長官

のところに行つて資産を求めたりしないようにするのひと骨おりをした。かくて、探るべき方法について意見が一致するまではと、みなをおさえるのに大騒ぎをしたのであつた。

身の破滅となる危険もないとわかつて今やわれわれは自由な人間らしい氣持になり、外出をしたり、許された範囲内でその町や近邊でみるに値するようなものをみたりして大變に楽しく暮した。町の身分卑しくない多くの人々とも知りあいになつた。これらの人々の人情の厚さ、外國人をいわば腹中にいれて遇したいといつた自由な態度にわれわれは故郷のなつかしい人々のことも一切忘れてしまふほどであつた。われわれは本當にみたり話したりする價値のある多くのものにたえず接した。實に人々の眼をひくにたる鏡がこの世の中にあるとするならば、この國こそそれであつた。

ある日仲間の二人が彼らのいわゆる一族の宴に招待された。それはこの國民が善良な性質をもつてゐることを示すはなはだ自然な敬虔な尊嚴ある習慣であつた。その方法は次のごとくである。自分の肉體から出た三十人の子孫が共に健在で、三歳以上になつてゐるような人にたいしてこの宴を張ることが許され、それは國家の經費によつて行われる。ターサンとよ

ばれる一族の父は宴の行われる二日前におのが好む三人の友を招き、その宴の行われる町の長官がこれに供奉する。一族の人々は男女ともに父の世話をするため召集される。この二日の間ターサンは一族の福祉について審議會を開く。一族の間に不和や訴訟事件でもあれば、これを調停し、融和する。一族のだれかが困窮し、貧におちいつてゐるならば、その救済と生活に必要な資産とをあたえる手段を講ずる。だれかが悪習にそまり、放蕩でもしてゐるならば、そのような人々はお叱りをこうむる。また結婚や一族のものの採るべき生活方針について同じような指令が發せられ、その他同様な命令や勸告があたえられる。長官は、ターサンの指令や命令に服従しないものゝいるときに公の權威をもつてこれを遵奉せしめるためにここに列席する。しかしその必要はほとんどない。「自然」の命令に彼らは尊敬と服従とをささげるからである。ターサンは息子のうちから一人をえらんで、おのが家にとともに暮すようにさせる。この息子はその後「葡萄の息子」とよばれる。その理由は間もなく明らかとならう。

宴會の日には父すなわちターサンは神聖な儀式ののちに宴會の行われる大きな部屋にあら

われる。この部屋の上手には上段の間がある。その上段の間の真中に壁を背にしてターサンのすわる椅子がおかれ、その前にテーブルとじゆうたんがある。いすの上には楕圓または圓型の天蓋があつて、それは木蔦でできている。わが國の木蔦よりはやや白みがかつて、白楊の葉ににているが、もつと光澤がある。それは多でも緑なのである。天蓋は銀やさまざまの色の絹でたくみに織られ、やはり木蔦のししうや縫い取りがしてある。この天蓋は一族中の娘が作るのであつて、その上には絹と銀との美しい網がかぶせてある。しかしその本質は木蔦で、それが取りおろされたあとでは一族の友人達がその葉や小枝を保存したがるのである。

ターサンは子孫と一族のすべてをつれてあらわれる。前には男が、あとには女がつきしたがう。もし一族のすべてを生んだ母親が生存しているならば、いすの右側の高い棧敷のようなところにしきりをして、それにかくし戸をもうけ、金色と青色のわくのついたガラス窓がきざまれる。その中に母親は坐るので、外からはみえない。ターサンがあらわれると、彼はいすにすわり、一族のものはみなそのうしろや上段の間の兩側に壁を背にして男女の別なく年齢順にならんで立つ。彼が腰をおろすころには部屋はいつも一杯になつてゐるが、よく

整頓してゐて亂れることはない。しばらくたつと部屋の下手からタラタン（傳令官のことである）がその兩側に若者をつれて出てくる。この若者の一人はあの光澤のある黄色い羊皮紙の巻物をもつており、他は長い莖のついた黄金の葡萄の一房をもつてゐる。傳令官も若者も海水のような緑色の絹子のマントをつけ、そのマントには金の縫い取りがあり、長裾がついてゐる。

それから傳令官は禮というよりは會釋を三度して、上段の間に近づき、ここではじめて巻物を手にとる。この巻物は國王の特許狀で、年金の授與や多くの特權、免除、榮譽をその一族の父にあたえる旨が書かれてある。それには「わが愛する友にして債權者たる貴下へ」といつた宛名がいつも書かれているが、これはこの場合だけにふさわしい稱號なのである。國王は臣民の繁殖にたいしてのみ債務を負うてゐるといわれているからである。國王の特許狀についている印章は黄金に浮きぼりされた國王の肖像である。このような特許狀は習慣的に當然の權利として發行されるのであるが、その家族の人数や身分によつて種々の相違がある。この特許狀を傳令官は聲高に讀む。その間、父すなわちターサンは彼のえらんだ二人の息子

にたすけられて立つている。それから傳令官は上段の間にあがつて、特許状を手渡す。それと同時に出席している一同は彼らの言葉で「ベンサレムの國民萬歳」という意味の喝采をする。

それから傳令官はもう一人の若者からぶどうの房をうけとる。これは莖も實も黄金であるが、實には上品なエナメルがほどこしてある。一族の男の數の方が多いたまには紫のエナメルをほどこし、その上に小さな太陽をのせる。女の數の多いときは緑がかつた黄色のエナメルで上に三日月をのせる。實の數は一族の子孫の數と同じである。傳令官はこの黄金のぶどうの房をターサンにわたす。ターサンはすぐにそれを先に自分と同じ家に住むようにきめた一人の息子にわたす。父が公の場所に行くときにはこの息子はこのぶどうの房を彼の前に榮譽のしるしとしてもつて歩む。かくて彼のことをぶどうの息子とよぶのである。

この儀式がおわると父すなわちターサンは退出し、しばらくたつて會食のためにふたたびあらわれる。このときも前と同じく彼は天蓋の下に坐をしめ、彼の子孫は官位や身分のいかんを問わず彼と同席することはない。ただサロモン學院のものは別である。ターサンはその

子供のうち男の子だけの世話をうける。すなわち彼らは膝まずいて食卓の世話を一切する。女たちはただ壁を背に彼のまわりに立つているだけである。上段の間の下の部屋には兩側に招待された賓客のための食卓がしつらえられる。賓客たちは立派なそれにふさわしい秩序をもつて給仕をうける。饗宴のおわりに（彼らの饗宴は最大のもので一時間半以上におよぶことはない）讚美歌がうたわれる。それはそれを作つた人の創意により種々さまざまである。（この國の人々はすぐれた詩作をもつていたのである）。しかしその主題は常に「アダムとノアとアブラハムへの讚美である。前二者はこの世界に人間を充滿させた人であり、アブラハムは信仰あるものの父であつた。宴の最後はわれらの救世主の誕生を感謝する言葉でおわる。救世主の生誕によりあらゆるものの誕生が祝福されているのである。

饗宴がおわるとターサンはふたたび退出し、一人祈りをする場所にと引きさがる。それから祝福をあたえるために子孫一同と三度あらわれる。子孫たちははじめのように彼のまわりに立つ。彼はおのが好むままに一人一人その名前をよんで招きよせるが、年齢の順序をくつがえすことは滅多にない。よばれたものは（テーブルはすでに取りのけられているので）椅

子の前に膝まずく。父はその手を息子または娘の頭の上におき、次のような言葉で祝福をあ
たえる。「ベンサレムの息子よ（またはベンサレムの娘よ）汝の父はかく語り、汝に息と生
命とをあたえしものはかく述べる。*とこしえの父、平和の君、*聖なる鳩の祝福汝の上に
あり、汝の*旅路の日々を善く、數多くならしめたまえ」彼はすべての子孫にかく語る。こ
れがすむと特にすぐれた器量と徳をもつ息子のいる場合には（それは二人以上におよぶこ
とはないのだが）それをふたたびよびだして、立つている彼らの肩に手をおき、「息子よよ
きかな 汝のこの世に生れたるは。神を讚美し、おわりまで怠るなかれ」という。かくて
二人に小麦の穂の型をした寶石をあたえる。彼はその後はこれをターバンか帽子の前につけ
ておく。これがすむとその日の残りはそれぞれに音楽やダンスやその他の娛樂にふける。こ
れがこの宴の一部始終である。

六七日すぎたころ、わたくしはジョアピンという名のその町の商人と親交をむすぶようになつた。この男はユダヤ人で割禮をうけていた。この國にはユダヤ人の子孫が少數のこつていて、彼らはおのが宗教をもつことが許されていた。そういうことが許されたのも、この國

のユダヤ人がほかの國のと非常に違ふ性質をもつていたからである。ほかの國のユダヤ人がキリストのみ名を嫌い、自己の周圍の國民に秘かに敵意をいだいてゐるのに反し、この國のユダヤ人はわが救世主に多くの高き徳をみとめ、ベンサレムの國民を大變に愛していた。このわたくしの語る男もたしかにキリストが處女から生れたこと、キリストが人間以上のものであることを認めた。神はキリストを神の玉座をまもる天使たちの支配者としたことを彼は語り、キリストを銀河とか*メシアのエリアとかその他の高貴な名でよんだ。これらの名前は神聖なる天帝の御名より劣るにせよ、他のユダヤ人のよぶような名とは全く違つていた。ベンサレムの國についてはこの男はこれをほめてうむところをしらず、この地のユダヤ人の傳説によつて次のような事實を信じさせたいと望んだ。すなわちこの國の民はナチヨランというアブラハムのもう一人の子の子孫であること、モーゼは秘法によつて今日用いてゐるベンサレムの法律を制定したこと、メシアがきてエルサレムの玉座につくときに、他の國王がはるかさがつてゐるのにベンサレムの國王はその脚もとに坐することなどであつた。しかしこれらユダヤ人の夢は別としても、この男は賢い學問のある才智すぐれた男で、この國の

法律や風習によく通じていた。

ある日いろいろ話していたうちに、わたしは「一族の宴」を張る彼らの習慣について仲間のものから聞いて大いに感動したことをこの男につげた。人情のかくも支配する祭典についてまだ聞いたことはないとおもうとわたしは語つた。一族の繁殖は婚姻の交りから出るものであるから結婚についてこの國にはどんな法律や習慣があるのか、この國では結婚はうまくいつているのか、一人の妻をまもつていいのか、この國のように人口の増殖が望まれているところでは一夫多妻が普通許されているものなのだが、とわたくしは訊ねた。これにたいし彼は次のようにこたえた。「一族の宴というあの立派な制度をおほめになるのはごもつともです。この宴の祝福にあずかつた一族のものはその後おどろくほど富みさかえたという事實もございます。しかしまあお聞きください。知つていただけはお話しいたしましょう。天が下にこのベンサレムの國民ほど貞潔な國民はなく、かくもあらゆる汚濁と邪惡とにけがされてない國民はないことがおわかりになるでしょう。この國民は實に世界の童貞です。あなた方ヨーロッパの書物で讀んでおぼえていることなのですが、あるありがたい隠者が姦淫の

精靈をみたいとのぞまれたところが、小さな汚い醜い黒ん坊があらわれたとのことです。しかしもしその隠者がベンサレムの貞潔の精靈をみたいとのぞまれたならば、美しい綺麗な天使に似た姿があらわれたことでしょう。ともうしますのはこの國の國民の貞潔な心よりも美しく稱讃すべきものは人間界にはないからでございます。それでこの國には蒸風呂とかあいまい屋とか娼婦とかさういつたものは一つもございません。いや、さういつたものを許しているあなた方ヨーロッパの方々をこの國の人々は不快におもつているのでございます。あなた方は結婚を不要のものにしてしまつたとみなはもうしています。結婚は不法な色慾をいやす療法として定められたもので、自然の色慾は結婚への拍車のようなものだからです。しかし結婚なんかよりはおのが墮落した意志にびつたりする療法が手近にあると、人々はその方にむかつて、結婚などは放逐のうき目にあうものです。さういうわけで結婚のきずなくくしめられるよりも結婚などはしないで、放埒な不純な獨身生活の方をよしとする人々がある。あなたの方のところには無数にいます。また結婚する人も晩婚の人が多く、人生の華やかな頼もしい頃はすぎています。その上に結婚する場合も、そこにあるものはただ取引關係だけで、

親戚縁者だとか持参金だとか名聲だとかいつた、子孫を生むこととはほとんど關係のないものばかりが求められているのです。最初に定められた夫と妻との誠實な結婚による結合などは求められません。またその精力をこんな卑しい行爲に浪費するような人が貞潔な人々と同じように子供たちを大切にするわけもございません。これが必要やむをえない行いとして許されるならば結婚後はよくなるはずなのに、結婚した後も少しもよくなりません。それどころかまるで結婚を侮辱するかのようになり、結婚したものがいまわしい家に入入したり、娼婦のもとにかよつたりしても獨身のものと同じように別段悪いこととおもわれておりません。變化を求める墮落した風習になじみ、罪が手くだと變る娼婦との抱擁の喜びなどにふけると、結婚は退窟な、一種の重荷とも負擔ともなつてしまいます。こういうことは姦通とか處女凌辱とか不自然な色慾といつたもつと大きな邪惡をさけるためなのだ。あなた方が辯解するのを聞いたことがあります。しかしそんな辯解は馬鹿馬鹿しい小才にすぎないとみなはもうし、それは客を町の人々の侮辱から救うために娘を提供しようとした*ロトの申出のようだといつています。いやなお進んで、そんなことをしてもなんの益もな

いといつています。惡徳と色慾とは相變らず後までのこつていて、さかんになるばかりだからです。不法な色慾は籠のようなもので、その焰をすつかり消してしまえば別のこと、それに少しでも風孔をあけると、また燃えくるうのです。男色という奴についてはこの國の人々には少しもそのような惡風はありません。しかしこの國の人々ほどの誠實な破れることのない友情は世界でもめずらしいものでしょう。要するにさきほどもうし上げましたように、この國の人ほど貞潔な人々についてもこの本で讀んだことはございません。この國の人のよくいう言葉に不貞な人は自分を尊重することができないというのがあります。また自己を重んずることは宗教についてすべての惡徳をおさえる大きな手綱だともいつております。

このようにいつて善良なユダヤ人はしばし沈黙した。そこでわたくしは自ら喋るよりも彼の語るのを聞いたかつたのだが、彼が言葉を切つているのに黙つているのは禮儀を失したことと考へ、簡単に次のような言葉をはさんだ。「ザレバテの寡婦がエリヤにいつたように、あなたはわれわれの罪をおもいださせるためにいらしたともうしあげたい。ペンサレムの正義はヨーロッパの正義よりも偉大です」この言葉に彼は頭をさげて、次のようにつづけた。

「この國の人々はまた結婚に關して多くの賢いすぐれた法律をもつております。一夫多妻は許しません。男女は初對面のち一ヶ月たたなければ結婚したり婚約したりできない規定になつています。兩親の同意のない結婚を無効とするようなことはありませんが、その罪は相續人にむくいるようになつています。ともうしますのは、こういう結婚から生れた子供は兩親の遺産の三分の二以上をつぐことは許されないので。架空の共和國についてあなた方のところのある方がお書きになつた書物のなかで、結婚する者は婚約前に互いに裸のところをみる事が許されるとあるのを讀んだことがございます。このようなことばこの國の人々は好みません。そのように親しく知りあつた後で拒絶されたりするのは侮辱だと考えるからです。しかし男女の體には多くのかくされた缺點のあるものですからこの國の人々はもつと禮儀正しい方法をとります。各都市の近くにはアダムの池とイヴの池といわれる二つの池がありまして、男方の友達一人と女方の友達一人とはそれぞれここで裸體で水浴している女または男をみる事が許されているのです」

このように話しあつているところへ立派な外套ヒュークをきた使のものらしい人がきて、ユダヤ人となにか話していたが、ユダヤ人はわたくしの方をむいて「いそいでこいという命令なので失禮いたします」といつた。翌朝彼はどうやら愉快そうな様子でまたわたくしのところへきて、次のように語つた。「サロモン學院の長老の一人が來週の今日當地へくるとのしらせが當市の長官のもとへまいりました。わたくしどもはこの十年あまり長老方には一人もおめにかかつておりません。この方のご入市のありさまは實に威風堂々としたものなのですが、當地にいらつしやる理由は秘密なのです。あなたさまやあなたのお仲間のためにご入市のよくみえるよい場所を準備してさしあげましょう」 わたくしは彼に禮をのべ、このしらせは大變にうれしいことだと語つた。

いよいよ入市の日となつた。長老は中背の中年の男で、からだつきも立派で、人々に憐みをたれるような容貌をしていた。廣袖のケープのついた美しい黒地の寛衣をまとい、下衣は足のところまであつてみごとな純白のリンネルで、同じく白リンネルの帯がついていた。頸には同じ生地シドンすなわち頸巻をつけている。寶石のついた精巧な手袋をはめ、柿色のピロードの靴をはいている。頸は肩のところまでむきだしだつた。帽子はヘルメットのよう

な、スペインの *モンテラのようなもので、その下からまき毛が上品にみえる。髪の色は褐色だつた。あごひげはまるく刈りこんで、色は頭髮と同じであつたが、これよりやや薄い。吊臺のような車のない立派な馬車にのつている。ししうをほどこした青いピロードのみことな飾りをつけた二頭の馬がこの馬車の前後にあつて、同じよそおいの二人の馭者がついてゐた。馬車は金をかぶせた杉でできていて、水晶の飾りがつけてある。ただ前の方には金のわくにはめたサファイアーをちりばめた鏡板があり、うしろの方はベルー色のエメラルドをちりばめた鏡板がある。中央の上には輝く黄金の太陽があり、前方の上には小さな黄金の天使が翼をひろげている。馬車は青地に金糸をぬいこんだ布でおおわれている。前の方には五十人の従者があゆみ、みな若者で、膝のところまである白いしゆすのゆるやかな上衣をつけ、白い絹の長靴下をはき、白ピロードの靴をはいている。彼らは青いピロードの帽子をかぶつていて、その帽子には鉢巻のようにまるくさまざまの色の美しい羽根が飾つてある。つきに馬車の前を二人の男がゆく。帽子はかぶらず、足もとまであるリンネルの着物をき、帯がついている。靴は青ピロードである。一人の男は十字杖を、他の男は羊飼の杖のような牧師

杖をもつている。この杖はいづれも金属ではなく、十字杖は香木で、牧師杖の方は杉であつた。馬にのつたものは馬車の前にもうしろにも一人もいない。混乱と騒擾をさけるためらしい。馬車のあとからは役人や町の諸團體のおもだつた人々がつきしたがつた。長老は一人、青い立派なブラシ天のようなざぶとんにすわつていた。彼の足の下にはさまざまの色の絹でできた精巧なじうたんがしかれ、それはベルシャじうたんに似ているが、もつと精緻なものであつた。長老は進み行く途上、人々に祝福をあたえるかのように手袋をしていない手をさしのべたが、口はきかなかつた。街上は驚くほど整然としていた。軍隊だつて今ここに人々が立つているほど立派な陣立に兵士を並べせることはできないであろう。窓も同じくこみあうようなことはなく、まるでそこに配置されたかのように一人づつ窓邊に立つていた。

行列がすぎてしまうとユダヤ人はわたくしに「このおえらいお方の饗應のため市から命ぜられました仕事がありますのであなたのおともをすることができません」といつた。三日後にまたこのユダヤ人はわたくしのところに来て、かたつた。「あなた方はご幸福な方々です。サロモン學院のご長老さまはあなた方が當地にいらっしゃることをお知りになつて、あなた方が一行

をご引見になり、えらばれた一人のお方と秘密の會談をしたいとのことです。それでこの旨を傳えてくれとわたくしにお命じになりました。そしてそのために明後日をお定めになりました。ご長老さまはあなた方に祝福をなさるつもりなので午前中にご指定でございます」

その日その時間にわれわれは出かけ、わたしが秘密の會談をする者として仲間のものからえらばれた。長老は立派な壁掛のある美しい部屋にいた。足もとにはじうたんがしかれ、玉座の間には階段がなかつた。彼は立派な飾りのついた低い玉座にすわり、頭の上にはししうのある青いしゆすの立派な天蓋があつた。長老一人だけで、ただきれいな白い服をきた二人の小姓が兩側に侍していた。長老の下着は馬車につていたときに着ていたのと同じであつたが、寛衣ではなく、同じく美しい黒地のケープのついたマントをしつかりと身につけていた。われわれは部屋にはいると、教えられたように入口のところで低い禮をした。そのいすに近づくと、彼は立上つて、手袋をとつた手をさし出し、祝福をする姿勢をとられた。われわれはみな腰をかがめて、その頸^{チベット}巻の裾に接吻した。それがすむと、一同は退出し、わたしだけが残つた。それから長老は小姓たちを部屋からさがらせ、かたわらにすわるようにわ

たくしにいつて、スペイン語で次のようにかたつた。

「わが子よ、神の汝を祝福したまわんことを。わしはわしのもつ最大の寶石をお前にやろう。神と人類との愛のためにサロモン學院の眞の状態をお前に物語ろう。息子よ、サロモン學院の眞の状態をお前に知らせるにあつて、次のような順序で話すことにする。第一にわが學院の目的、第二にわれわれの仕事のために所有する装置および器具類、第三にわが研究生の従事する仕事および機能、第四にわれらの行儀式、典禮だ。

わが學院の目的は事物の諸原因と秘かな運動に關する知識であり、*人間帝國の領域を擴大して、可能なあらゆることを成就するにある。

装置や器具類にはこんなものがある。まずいろいろの深さの巨大な洞窟がある。この最も深いものは六百ひろもある。あるものは高い山の下に掘られ作られてあるから、山の高さと洞

窟の深さを加えると、三マイルの深さにおよぶ。山を深く掘つたものも平地から深く掘つた洞窟も同じことで、ともに太陽の光や天體の光、大氣から遠くへだてられていることがわかつているからである。これらの洞窟をわれらは下界とよび、諸物體の凝固、硬化、冷却、貯藏に使用する。また自然の鑛山を模倣するためにこれを利用し、われらのもつている諸原料の合成によつて新たな人工の金屬を生産し、長年これをそこに貯えておくためにも使用する。それはまた（不思議におもつかもしれないが）ある病の治療のためにつかい、また必要な品々を用意して、自らすすんでそこに住む隠者のために長命の用にもあてる。隠者は事實ここに長いこと住んで、われらは彼から多くのことを學ぶのだ。

また各種の地中に埋藏所をもうけ、そこに各種のセメントをしまつておく。支那人が陶^{ポリス}土をしまつておくようなものだ。しかしわれらのはその種類もさまざままで、支那のよりは精妙だ。土地をこやすためのいろいろな種類の肥料や土壤ももつている。

高い塔もある。最高のものは半マイルの高さがある。これもあるものは高い山の上にたててあるから、山の高さと塔の高さと合して、最高のものは少くとも三マイルにおよぶ。ここ

をわれらは上界とよび、高地と低地との中間にある空間を中層界とみている。これらの塔はその高度と位置とに應じて、日光にさらしたり、冷却したり、貯藏したりするために使い、風、雨、雪、あられなどの各種の氣象の觀察に用い、また天體の發火現象のあるものの觀察にも使用する。この塔のある處には隠者の住いがあり、われらは時々これをおとずれて、觀察すべきものにつき教えをこう。

また鹹水および淡水の湖があり、これを魚や鳥類のために使用する。またこれらは生物の埋葬のためにつかう。地中にうめたもの、地中の空洞中にいれたもの、水中にほうむつたもの、これらの間に相違のあるのをわれらは知つているからだ。また鹽水からなま水をこし出し、人工によつてなま水を鹽水にかえた池がある。海の空氣や蒸氣を必要とするある仕事のために海の眞中にいくつかの岩をもうけ、海岸に入江をつくつた。また急流や瀑布をもち、これは動力を供給する。同じく種々な動力をおこすために風の力を倍化し強化する機械をもつている。

自然の泉や温泉をまねて作つたいくつかの井戸や泉もある。それは硫酸、硫黃、鋼鐵、眞

鉛、鉛、硝石、その他の礦物の特質をもつてゐる。またわれらは多くのものに浸出作用をおこなうための小さな井戸をもつ。その水は皿や鉢の中の水よりも急速により大きな效力を發揮する。それらの中に『樂園の水』とよぶ水がある。それにある操作を加えるとそれは健康と長壽の特效薬となるのだ。

また大きな広い家があつて、そこでは天文現象をつくつてみせる。雪、あられ、雨、それから水ではなく、ある人工の物體の雨もつくり、雷鳴、電光などもつくる。蛙とか龜とかその他さまざまのものを空中に繁殖させる。

また『健康の部屋』とよぶある部屋があつて、そこで種々な病氣の治療や健康の保持に適當と考えるように空氣を調節する。

また立派な大きな浴場もあり、それは各種の合劑よりなつていて、病氣を治療し、水分のかれた身體を回復するのに役立つ。また腿や急所を強化し、身體の體液と本質とを丈夫にするための浴場もある。

また大きなさまざまの果樹園や菜園もある。そこでは美觀よりもいろいろな種類の草木に

適した土地や土壤の多様性が重んぜられる。なかには非常に広い果樹園もあつて、ぶどう島のほかにそこに植えられている果樹や漿果からさまざまの飲料がつくられる。そこでまた果樹のみならず野生の樹木にも接木や接枝のあらゆる實驗をおこない、多くの効果をあげている。その果樹園や菜園では人工によつて樹木や草花を季節よりも早く、あるいはおそく生長させ、自然の成りゆきにまかせた場合よりも急速に生長させみのらせる。また人工により自然よりも數多くみのらせたり、その果實を自然よりも大きく、甘くし、自然とは違つた味や匂いや色彩や形にかえる。それから果物の多くは薬用となるように處理する。

われらはまた土壤の混合によつて種々な草木を生長させ、また普通とは違つたいろいろな新しい草木をつくり、ある草木を他のものにかえる方法をしつてゐる。

われらはまた獸や鳥を飼つておくためのあらゆる種類の園や園い地をもつてゐる。それは展覽に供するためとか珍奇をもとめて使用するのではなく、解剖と實驗とのために用いる。それによつて人間の身體におよぼす作用を明らかにしようとするのだ。そこでは多くの奇妙な實驗の結果がえられている。たとえばお前方が急所としてゐる身體のいろいろな部分を死

滅させたり除去したりしても生命がなからえているとか、一見したところ死んだようにみえるものを蘇生させるとかいつたものだ。またわれらはあらゆる毒物、あるいは内科外科の薬物を彼らに試みる。人工によつて彼らを普通よりも大きくしたり、たけを高くしたり、反対に小さくしたり、生長をとめてみたりする。また普通よりも多産にして子を生まれさせ、反対に不妊にして繁殖をとめさせる。色彩、形状、活動その他いろいろな點で普通とは違つたものを作つたりする。いろいろの種屬を混合し交配させ、多くの新種をつくる。しかもそれは普通といわれるように不妊とはならない。腐敗物からいろいろな種類の蛇、蠕虫、飛虫、魚をつくる。そのあるものは（事實）進歩して、獸や鳥のような完全な動物に近く、兩性があつて、繁殖する。これは偶然の結果ではなくて、いかなる物質、いかなる混合から、いかなる種類の生物が生れるかわれらはあらかじめ知つてゐるのだ。

また特別な池があつて、獸や鳥について前に話したような實驗を魚にたいしてやつてゐる。また特別の用途にあつてゐる蠕虫や飛虫のある種類を育て繁殖させる場所がある。それはお前方のところの蠶や蜜蜂のようなものだ。

醸造所や製パン所や司厨の話をしてお前を長くとめておこうとは思わん。そこでは珍らしい特別な效能のあるさまざまの飲物やパンや肉類をつくるのだ。ぶどうからとつた酒もあれば、その他の液汁、果物、穀類、草根などからとつたものもあり、蜂蜜、砂糖、マナ、ほしで煎じ出した果物などとの混合液からつくつたものもあり、また樹木の傷口や樹液、甘蔗のバルブからつくるものもある。これらの飲物は數代をへており、そのあるものは四十年の長きにおよぶ。また數種の草や根や香料をもつて醸したものもある。いや、獸肉類や鳥肉類でつくつたものもあつて、そのある飲物のごときは肉類と飲物と一緒にした効果をもつので、特に老人などはほとんど肉やパンなどはとらずにこの飲物を常食として生きていこうと望んでいる。なかんずくわれらはごく微小な分子よりなる飲料をえようと努力している。それは身體のなかに浸透して、しかも疼痛、激痛をあたえて、いらだたせるようなことはなく、そのあるものの如きは手の甲にのせると、ほとんど止まることなく掌の平につきとおる。それでいて口あたりはよい。われらはまた滋養になるように芳醇につくりあげた礦水をもつてゐる。それは非常によい飲物なので、多くの人々はほかのものをういようとはしない。いろいろ

ろな穀類、草根、木の實でつくつたパンもある。そうだ、ほした肉や魚といろいろな酵母と調味劑とでつくつたのもある。そのあるものは非常に食欲をそそり、滋養もあるので、ほかの食糧などなしで、これだけで暮しているものもある。しかしそういう人々は非常に長生きをする。肉についていうと、われらはこれをうちたき、やわらかくして、しかも腐らないようにしてある。それで胃の腑の弱い熱だけでも、強い熱で料理したときと同じようによく消化することができる。また人がそれをとるとその後長い間斷食していられるような肉類やパン、飲料をもっている。またあるものはこれを用いると、人間の肉體を眼にみえて逞しく丈夫にし、その體力を常よりも強固にするものがある。

われらのところには薬局や調劑所もある。ここはお前方ヨーロッパよりも草木も生物も種類が多いのであるが（というのはお前方のところにとんなものがあるかはわしらは知っていないからいうのだ）同じく藥草や藥劑や醫藥のための材料もお前方のところよりもはるかに種類が多いに相違ないことはお前にも容易にわかるだろう。またその藥劑は幾代も時代をへた、長いこと醗酵させたものなのだ。その調製のためにはあらゆる方法の精妙な蒸溜や分離をや

り、特に微熱を加えて作つたり、種々な濾過器によつて濾過したりする。いや原質による濾過もやる。そればかりでなくほとんど野生の藥草とかわらぬように調製するための合成の精密な公式もしつていゝる。

われらはまたお前方のもたぬ種々な機械技術をもっている。それでつくられる製品には紙、リンネル、絹、織物、すばらしい光澤の上品な羽根細工、優秀な染料その他がある。われらの間に廣く一般に用いられているものばかりでなく、そうでないものをも製造する工場がある。というの、知つておいてもらいたいのだが、前に述べた品物のうちその多くは王國內にひろく用いられるようになっていゝるが、それがわれらの發明から出たものである場合には、（一般に用いられないものでも）原型または模型のためにつくつておくからだ。

われらはまた種々な爐をもち、種々な熱をつくる。激しく急速なもの、強く持續的なもの、柔らかくおだやかなもの、噴出するもの、靜かなもの、乾いたもの、濕つたもの、その他いろいろある。しかしなかでも特に太陽や天體の熱に似せた熱をつくる。それは（いわば）軌道帶、順行、逆行といつた種々な均差をうける。かくすることによつて、われらはみごとな

効果をつくり出すのだ。このほか糞尿の熱とか生物の腹と胃の腑の熱とか、しめらして積みかさねた乾草や生草の熱や生石灰の熱といったものもある。また*運動だけで熱を生ぜしめる器具がある。その上に強い日光にさらす場所や、また自然または人工により熱を生む地下の場所もある。これらのさまざまな熱はわれらのおこなおうと思う作業の性質の必要に応じて用いるのだ。

われらはまた光學研究所をもつ。そこではあらゆる光線や放射、あらゆる色彩の實驗をする。無色透明なものから、あらゆるさまざまな色をつくり出すことができる。それは（寶石やプリズムの場合のように）虹色としてではなく、単色でつくり出すのだ。また遠くの方までとどくように光線を強化し、またこれを鋭くして小さな點や線までも見分けるようにする。光線にあらゆる色彩をあたえ、型、大いさ、運動、色彩において視覺をあざむきいつわることもし、あらゆる陰影をしめす。またさまざまな物體から自然發生的に光をつくり出す、お前方の知らない色々な方法をわれらは知つてゐる。天や遠隔の地のような遠いところにある物體をみる方法も心得ており、近いものを遠いものとし、遠いものを近いものとして示し、

かくて偽りの距離をつくつたりする。また眼鏡や雙眼鏡よりもはるかに有效な視力を助ける器具をもつてゐる。小さな微小な物體を完全に明瞭にみるための眼鏡ももつてゐる。ほかの方法ではみることのできないような小さな飛虫や蠅虫の型や色彩、寶石の木理や疵などの類である。またほかの方法ではみられない尿や血液の觀察などである。人工の虹や暈や光の周囲の圓光などもつくる。また物體の眼にみえる光のあらゆる反射、屈折、強化をもおこなう。

われらはまたあらゆる種類の寶石類をもつてゐる。そのあるものは非常に美しく、お前方の知らぬものだ。水晶もある。またいろいろの種類のガラス器具もある。そのうちにはガラス化した金屬でできているものもあれば、お前方のつくるガラスと同じ原料のほかに、別の原料でできたものもある。またお前方のところにはない化石や不完全な鑽石もいくらかある。また驚くほどの效力ある磁石もあり、その他、自然や人工の珍らしい寶石類がある。

われらはまた音響研究所をもち、そこであらゆる音響とその發生とを實驗し示す。われらはお前方のもつていないような四分の一音やもつと微妙な音の調和音をもつてゐる。また同じくお前方の知らない種々な樂器もあり、そのあるものはお前方のよりも心地よい音を出す。

これと同時に上品な氣持よい音色の鈴や環などもある。小さな音を大きな深い音とし、大きな音を低い鋭い音とする。本来は渾然とした一つの音響からふるえるような音やころがるような音をつくる。一個の思想をもつ音や文字のすべて、獸や鳥の聲やしらべをあらわし兼ねる。耳につけて聴覺を増強するある器具もある。われらはまた聲を幾度もはねかえして、いわばそれを突きあそぶかのようにする不思議な人工の反響をもつ。そのあるものは元の聲よりも大きな聲をかえし、あるものはもつと鋭く、あるものはもつと深い音とする。そうだが、あるものは文字や音であらわすと前とは意味の違つたものとなるような聲にすることもある。われらはまた筒や管で不思議な方向へ遠い距離まで音をつたえる方法をしつてゐる。

われらはまた香氣研究所をもつ。味覺の實驗もそこでやつてゐる。不思議と思うかもしれないが、われらは匂いを強化したり、それをまねたりし、あらゆる匂いとその發生した元の合成物とは別の合成物から出したりする。またわれらは種々な味を模倣して、人々の味覺をあざむくこともする。この研究所内には菓子製造所もあつて、そこであらゆる乾菓子や生菓子、うまいぶどう酒、ミルク、肉汁、サラダなどお前方のところよりも種類の多いいろいろ

なものをつくる。

われらはまた機械工場をもつ。そこにはあらゆる種類の運動のための機械器具類がある。そこではお前方のところよりも速い運動をおこすまねをしたり、實驗をしたりする。お前方のところにある小銃やその他あらゆる機械よりも速い運動だ。また車輪やその他の方法によつてわずかな力で運動をおこし、容易にこれを強化することもやり、お前方のところよりもそれを強力に激しいものとし、お前方の最大の大砲やバ*ジリスク砲をも凌駕するほどにする。われらはまた大砲やその他あらゆる種類の武器類をつくる。また新しく混合し合成した火薬や水の中で燃えて消えることのない燃料をつくり、また娯樂用、實用のための花火もつくる。われらはまた鳥の飛翔をまね、ある程度空中を飛ぶことに成功した。またわれらは海底にくぐり、大洋に抗して進む船やボートをもち、また遊泳帯や浮袋をもつ。われらはまた種々な珍らしい時計やその他同じような回歸運動をするもの、あるいは永久運動をするものをもつ。われらはまた人間、獸、鳥、魚、蛇などの生物をつくつて、その運動を模倣する。またその均衡性、精妙さ、微妙さにおいて不思議なほどの種々な多くの運動を行なう。

われらはまた數學研究所をもつ。そこには精妙につくられたあらゆる天文學および幾何學の器具類がある。

われらはまた感覺欺瞞研究所をもつ。そこであらゆる方法の手品の藝當、偽の幻影、虚偽、錯覺を示し、その欺瞞を暴露する。お前もわけなく信じられると思うが、われらのところには人々の稱讚を博するような眞に自然な事物が澤山あるのであるから、われらがこれに偽装をあたえて、もつと奇蹟的なものにみせようと骨おるならば、感覺をだますぐらいのことはいくらでもできるのだ。しかしわれらはあらゆる欺瞞やいつわりを嫌う。それでわれらは犯せば不名譽と罰金との苦痛をあたえると同胞につけて厳しくこれを禁じている。であるから人々は自然の事物を飾り立てたり、誇張したりして示すことなく、純粹にありのままにこれを示して、ものめずらしさをてらうようなことはしない。

以上が、わが子よ、サロモン學院の富なのだ。

研究生の種々な職務や任務についていうと、外國人の名前で（わが國の名はかくしておる

のでそういうのだが）外國に航海する十二人の者がいる。この連中はあらゆる外國の實驗に關する書物、抜粹、模型をもちかえる。われらはこれを『光の商人』とよんでいる。

あらゆる書物に記載されている實驗を蒐集する三人がいる。これは『掠奪者』とよぶ。

あらゆる機械的技術、高等科學、學藝にまで到らない實習についての實驗を蒐集する者が三人いる。これを『神秘家』とよぶ。

みずから善しとかんがえる新らしい實驗を試みる三人がいる。これを『先驅者』または『抗夫』とよぶ。

以上四つの實驗に表題をあたえ表をつけて、そこから實驗の結果と公理とを引き出すための光をあたえる仕事をする三人がいる。これを『編集者』とよぶ。

ひたすら同僚の實驗をしらべて、そこから人間の生活や知識に役に立ち實用となるものを引き出す工夫をする三人がいる。しかもそれは一般的な仕事だけではなく、諸原因を解明し、自然に關する豫言の方法を引き出し、物體の效用や役目を容易に明らかに示したりするに役立つ知識に及ぶ。これを『資源賦與者』または『恩惠者』とよぶ。

以上の仕事や蒐集を考察するために全會員が集つて審議した後で、そこから以前よりもつと自然につき入つて、高い光のためになる新しい實驗を指令するような注意をする三人がいる。これを『燈火』とよぶ。

このように指令された實驗を行い、これを報告する者が三人いる。これを『芽接ぎする人』とよぶ。

最後に以上の實驗による發見を一層大きな觀察の結果や公理や定理に高めることをする三人がいる。これを『自然の解釋者』とよぶ。

お前さんも考えるに相違ないと思うのだが、以上のような仕事をしている者のあとをたたないようにするため見習生や新入生をわれらはもつている。そのほかに大勢の男女の召使や助手がいる。またこういうこともする。われらが發見した發明や實驗のうちでいずれを發表し、發表せぬかを相談し、秘密にしておくのが適當と考えるものは、これをかくして秘密をもらさぬという誓をするのだ。もつともある秘密は國家にたいしては洩らすこともある。

儀式や典禮についていうと、われらのところには非常に長い美しいギャラリーが二つあつて、その一つにはあらゆる型の珍らしい優れた發明の原型や模型がおかれ、他の一つにはあらゆる主立つた發明家の像がおかれてある。そこには西印度を發見したお前方のところのあのコロンブス、船舶の發明者、大砲や火薬を發明したお前方のところの修道僧、音楽を發明した人、文字の發明者、印刷の發明者、天文學觀測の發明者、金屬細工の發明者、ガラスの發明者、蠶の絹の發明者、酒の發明者、穀類やパンの發明者、砂糖の發明者、こういう發明者の像があり、それはみんなお前方のところよりもつと確實な傳承によつてゐる。またわが國の發明家もあるがそのすぐれた業績はお前方のみたこともないものばかりだから、これについて述べるとなるとあまりに長くなるし、それにそういうことを話してみたところで正しく理解してもらえそうもなく、ただ誤解されるだけだろう。價值ある發明のあるごとにはわれらはその發明家のために像を立て、十分に名譽ある褒賞をあたえる。これらの像は、あるものは眞鍮、あるものは大理石や試金石、あるものは杉やその他の特別な木で金箔を塗り飾り立てる。またあるものは鐵、銀、金などでつくる。

また日々、大聲で唱えて神の不思議なみ業を感謝するための讚美歌や勤行があり、われらの労働に光をあて、これを善き神聖な用途にとかえるために神の援助と祝福とを願う祈禱の形式もある。

最後にわれらは王國の種々な主要都市を巡回し訪問する。そこで時に應じて善いと考える新しい有益な發明を公表する。また病氣、疫病、有害な動物の來襲、饑饉、暴風雨、地震、大洪水、彗星、その年の氣温、その他さまざまの自然に關する豫想を發表する。そしてその豫防と救済とのために人々の爲すべきことにつき勸告する」

以上のようなことを語ると、彼は立ち上つた。わたくしは教えられたように膝まずいた。彼は右手をわたくしの頭の上のせて、「わが子よ、神の汝を祝福せんことを。神の余が物語を祝福せんことを。わしは他の國民の幸福のためにこの物語を公表する許可をお前にあたえる。われらは神の御贖、未知の國にいるのだから」そういうふうについて、わたくしのもとを去つた。そのときに約二千ダカットをわたくしやその仲間への贈物としてのこしていつ

た。長老はどこへ行つてもあらゆる場合に應揚なほどこしものをしたからである。

(原文はここで未完となつてゐる。)

87

註

- 一 淵にて 詩篇第百七篇二十三節乃至二十四節。「舟にて海にうかび大洋にて事をいとなむ者は、エホバのわざを見
また淵にてその奇しき事跡をみる」
- 二 元始に淵の面……乾ける土 聖書創世記第一章第一節、第二節第九節等よりとつた言葉。
- 一六 ピストル金貨 一六〇〇年頃には十六志大片乃至十八志のスペイン金貨のことをいつた。
- 一六 綾織の呉縞 Water chamole のか、山羊の毛または駱駝の毛にて織つたもの。
- 一七 遠矢で 大體二百ヤードから三百ヤードぐらゐといわれている。
- 三三 ヨナ 舊約聖書のヨナ書のみよ。ユダヤの預言者で、タルシンへ行く船中暴風雨にあい、彼に罪ありとされて、海
中に投ぜられ、大魚に呑みこまれるが、その腹中で神に懺悔し、陸にはき出された。
- 三七 その舌 ヨブ記第二十九章第十節「その舌を上顎に貼けたりき」
アルメニアで皮を剥がれて死んだという。その祭日は八月二十四日となつてゐる。
- 三三 異邦人の言語 五旬節の日に使徒たちに異邦人の言葉を語る力があたえられる奇蹟が行なわれた。使徒行傳第二
章を参照されたい。
- 三八 大アトランチス 解説一〇七頁以下を参照せられたい。
- 三八 ハーキュリーズの柱 今日のジブラルタル海峡のこと。ハーキュリーズに課せられた「十二の仕事」のうち
ゼリアンの牛を手に入れる仕事に際して、彼はこの地にカルピミアパイラという二つの山を起したといわれ、ある

いは山を二つに裂いて海峡をつくつたともいわれている。この二つの山を「ハーキューリーズの柱」といい、古代ではここが航海の果とされていた。

三六 キャンバリン 原文は Cambaline とあるが、キャンバル Cambaluc 又はキャンバルック Cambaluc の誤で、マルコ・ポロなどによつてよばれてきた北京の古名ならんという。ペイコンは北京を海港と考へていたらしい。

三六 クインツイ マルコ・ポロの述べている今日の杭州のこと。

三九 ネブチユーンの子孫 プラトンの「クリティアス」によるとボサイドン（ローマ人の所謂ネブチユーンで、地中海の神）がアトランチスの土人の娘クレイトーを戀し、その子孫がこの地に榮えて、王國をつくつたとされている。解説一〇頁以下を参照されたい。

三九 天の梯 ヤコブが夢にみたという梯から出ている言葉（創世記第二十八章第十二節）。聖バーナードもこれと同じ幻を見て、ローマのその教會は當時英國國民の間にも尊信をえていた。ペイコンをはじめミルトンらが廣くこの言葉を比喩的に用いている。

四三 ソラモーナ ペイコンはこの王をもつてジェームズ一世をたたえんとしたとの説もあるが、ペイコン全集の編者者の一人であるスペディングはこれに反對し、ジェームズ王即位間もなくこの作品が書かれたならば、その説も一應諾せられるが、二十餘年を経た後に作られたものである上に、王が自然科学にたいして大きな興味を示したこともないのであるから、かかる説は無用としている。

四三 はかりしれない 箴言第二十五章第三節「天の高さと地の深さと王たる者の心とは測るべからず」

四七 レバノン 列王紀略上第四章第三十三節「彼また草木の事を論じレバノンの香柏より地に生る苔に迄及べり彼ま

た歌と鳥と細行物と魚の事を論じたり」但し欽定英譯聖書をはじめその他の英譯聖書もラテン譯ギリシヤ譯聖書も Mosse (古)ではなく Lysop の語となつており、これは古語は異なるものといわれている。ペイコンが何かこの語を得たかは不明。日本語は上述の如くなつてゐる。

四五 アダムとノア アダムは創世記第一章に述べてある如く人類の祖であり、ノアは創世記第六章に述べてある如く箱舟によつてその一族とともに大洪水の難をまぬがれたから、ともに人類の祖といわれている。アブラハムはその子イサクを犠牲に供せむとして神の試練にたえ信仰の父といわれる（創世記第二十二章）。

五六 とこしえの父 イザヤ書第九章第六節「とこしえのちち平和の君とせなえられん」

五六 聖なる鳩 ルカ傳第三章第二十二節「聖靈、形をなして鴿のごとくその上に降り」

五六 旅路の 創世記第四十七章第九節「ヤコブパロにいけるはわが旅路の年月は百三十年にいたるわが齢の日は僅少にしてかつ悪かりいまだわが先祖等の齢の日と旅路の日にはおよばざるなり」

五七 メシアのエリア ヘブライの預言者、ユダヤ人の傳説によればメシア出現の前にふたたび地上にあらわれるといわれ、過越節の日に食卓にその席を用意しておくという。

六〇 ロトの申出 ソドムの住人で、二人の天使を宿したとき町人襲ひ來たつて引渡すことを要求した。このときに「我に未だ男知らぬ二人の女あり請う我これを携え出ん爾等の目に善き見ゆる如く之になせよ」といった。この行爲によつてソドム滅亡に際し彼の一族は救われる（創世記第十九章）。

六二 ザレバテの寡婦 預言者エリヤの命によりザレバテに來たり、その貧しき寡婦の家を宿して、盡きることのない粉と盡きることのない油とを興えて暮らしていた。寡婦の一人子病重くなり息たえたときに「神の人よ汝なんぞ吾

事に關涉^{たずさわ}るべけんや汝はわが罪を憶い出さしめんため又わが子を死なしめん爲に我に來れるか」を寡婦が述べた。ときにエリヤはこの子を携え行きて、神に祈り、その息を吹きかえさせた（列王紀略上第十七章）。

六二 架空の共和國 トーマス・モアの「ユートピア」のこと。解説一四頁以下を参照せられたい。

六三 人々に憐みを 解説一六頁を参照せられたい。

六四 モンテラ 猿人などのかぶる丸形の帽子で、頭の兩側面をおおうことのできる髪がついている。

六四 鬚髪は 鬚髪は頭髪よりも濃いのが普通であるがベイコンはこれを承知の上でこう書いたものと思われる。

六七 人間帝國の領域 人間王國 (regnum hominis) の擴大はベイコンが科學研究の最終目的として常に念願して

いたものであった。

七五 軌道帶 昔の天文学で、地球を中心として十の軌道帶があり、この中の遊星等はこの軌道帶とともに地球のまわり

を回轉するといふ。順行 (Progress) とは遊星が西から東へ進行することを指す Progression のことであらう。

逆行 (retum) とはその逆で、遊星が一見東から西へ逆行することくみえる現象をさすらしい。均差とは天體が

通常の運動から逸脱する現象であつて、昔の天文学ではその場合を幾つか列挙している。この箇所はベイコンの真

意をくみかねるので、暫定的な譯としておく。

七六 運動だけで 熱は運動の一種であるとの結論は「ノーヴァム・オルガナム」第二卷においてベイコンのえた結論

であった。

七九 バジリスク砲 バジリスクとは一にらみで高物を殺すといふ蛇のことで、これにちなんで名づけた一種の大砲。

八一 編集者 これは「ノーヴァム・オルガナム」第二卷十一節より十三節に述べてある「願在表」、「缺如表」、「程度表」

にあたる。

八一 資源賦與者 この役目は「ノーヴァム・オルガナム」第二卷二十節で述べられる「解釋の開始」、「最初の收穫」にあ

たる。

解
說

『ニュ・アトランチス』はベイコンが晩年に作つたユートピア物語である。近世の幕がひらかれたルネサンスにあつて實驗と觀察の方法を説いて近代科學の祖といわれ、歸納法の論理によつて近世哲學に貢献した彼がいれば生涯の夢を紙上にきずきあげたものであつた。モアの『ユートピア』などにならつて太平洋上に一孤島を想定し、ここに彼の夢をたくした。それは夢ではあつたが、そこには彼の長い年月にわたる思想が具體化されている。しかしそれだけではない。これが彼の空想の飛翔をゆるす文學的作品であるだけに、そこには彼の感情や趣味といつたいわば彼の肉體がほのみえる。そこに彼の哲學的著述とはおもむきを異にした文學としての面白みがあつて、われわれの心をたのしませる。

『ニュ・アトランチス』が出版になつたのは彼の死んだ翌年一六二七年のことで、彼の家の牧師であつたワイリアム・ローリーが編集した『森また森 Sylva Sylvarum』と一つにし

て出た。この『森また森』はベイコンの實驗觀察や古來の科學的資料を集めて、「博物學」と銘うつたものであつた。『ニュー・アトランチス』がいつ頃書かれたかということについては種々な説もあるが、ローリーは大體一六二二年から一六二四年の間につくられたものと推定している。ローリーの出版した『ニュー・アトランチス』には「讀者へ」という題で彼の次のような序文がついていた。

「閣下がこの架空物語をつくられた目的は、人類の幸福のための偉大な驚異的な事業の達成と自然の解釋とのために設立される學寮コレヂの模型および情況をお示しになることにあつた。この學寮はサロモン學院または六日間御行續の學寮とよぶ。閣下はこの物語をこの邊までお進めになつた。確かにこの模型はあらゆる點で老大な崇高なもので模倣しかねるほどである。しかしそこに述べられている多くのことは人間の力で達成できないものではない。この架空物語のなかに閣下は法律機構や理想的な國家の機構をお示しにならうと考えられた。しかしそれは大變に老大な御著述となられることをお考えになり、また閣下が非常に重視していられた博物學の蒐集の御希望があつたため、お心を變えられたのである。

この『ニュー・アトランチス』のご著述は（英語版に關するかぎり）こういう編集方針で出版される意圖を閣下はおもちになつておられた。蓋しこの作品は前掲の博物學と密接な關係があるからである」

『ニュー・アトランチス』はベイコンの哲學的思想が骨格となつてゐる。そこでこの作品と關係ありとおもわれる彼の思想の展開をたどつてみよう。フランシス・ベイコンは一五六一年一月二十二日に生れ、父は國譽尙書という榮職にある政治家であつたから、幼いときから政治的な雰囲気の中に生活してゐた。また父も母も熱心な新教徒で、その宗教的な感化はベイコンの精神生活を形成する大きな要素であつた。ベイコンは實驗と觀察という近代科學の方法を説いたけれども、信仰と理性との領域を明確に區別して、神の問題を理性をもつて解決しようとする人間の不遜を排した。彼にとつては自然の法則は神的秩序のあらわれであり、自然を研究することは神への奉仕であつた。彼の自然科學の研究はそういう宗教精神の上ですすめられていた。『ニュー・アトランチス』においてもわれわれは彼のキリスト教への信仰

の深いことをうかがうことができる。一五七三年、十三歳のときにケンブリッジのトリニティー學寮に入學したが、在學中すでにアリストテレスの哲學の「人間生活を益すべき作物を産出」せず、ただ論争に終始することを非難したとローリーはベイコン傳の中で語っている。歸納法の論理を唱導する未來の姿はここにその一端をあらわした。大學を卒業後、フランス滞在中に父の死の報に接し、歸國したが、彼にあたえられた財産の案外に貧弱であつたため好きな哲學研究に専心するわけにもゆかず、官界において身を立てようとした。収入ある相當な地位につくことによつて眞理の探求も可能となると彼は考えたのであつた。かくて彼の二重生活がはじまつた。その職官運動は彼の手紙などからみても憐れなくらいに卑屈なものであつた。しかしエリザベス女王在世中には望む官にもつけず、ただ國會議員たるにあまんじていなければならなかつた。時の權臣エセックス伯にとり入つたりしたが、エセックスが没落するや政府の命令で伯を弾劾する聲明書を書いて、伯の恩義を仇でかえずようなことも平氣でやつた。しかしこの間にも彼の哲學研究はすすめられていたらしい。エセックス伯のために書いた素人芝居の脚本の中で彼は、哲學は新しい發見をおこない、人間生活を豊かに

するものなることをのべ、印刷、火藥、羅針盤の發明が偶然の發明であつたにもかかわらず人類に大きな貢獻をしていることを語つて、組織的に自然の隠くされた寶を發見することにとめれば、その効果はきわめて大きいであろうと説いた。また劇の脚本では作中人物をして次のような計畫を語らせている。

「わたくしは閣下に四つの主な御事業と記念物をおすすめいたします。まず第一に最も完全な全般的な圖書の蒐集でございます。これまで價值ある書物となつて人間の知能の生み出した一切がこれによつて閣下のお知恵のお役にたつこととなります。古代、近代をとわず、印刷されたもの、まだ草稿のままのもの、ヨーロッパのもの、その他各地のもの、あらゆる言葉で書かれた一切の書物でございます。次には廣やかなみごとな御園をもうけられることでございます。そこにはあらゆる土壌から出ました天が下のあらゆる植物、人工のものも野生のものも、すべてその生長に適當な注意をもつて移しうえられ育てられます。その園のまわりにはあらゆる珍しい禽獸をいれる小屋をつくります。またさまざま魚類をいれる淡水と鹹水の二つの池をもうけます。それでわずかな土地に全宇宙の自然の模型がわがものと

もなるのでございます。第三には壯麗な博物館で、精妙な技術や機械で人間の手がつくりだした珍しい材料や型や運動をもつもの、事物の特性と偶然と變化とによつて生み出されたもの、自然の作り出した生命のないもの、これらの一切が分類されて、そこにおさめられます。第四は蒸溜室で、機械・器具・用器・爐をしつらえた哲學者の石にふさわしい宮殿でございます。

三十年の後にサロモン學院となつて『ニユ・アトランチス』のなかにあらわれる構想はすでにここに芽をふきはじめていることがわかるであらう。

エリザベス女王在世中はうだつのあがらなかつたベイコンも新にジェームズ王が即位すると(一六〇三年)新しい元氣をもつて地位を求め、ついに一六〇七年にはソリシダー・ジェネラル 検事次長となつた。しかも間もなく従弟のロバート・セシルが死に、彼の前途はようやく開けてきた。

この優れた従弟のいる間はベイコンの出世は常にはばまれていたとみることもできる。やがてベイコンは待望のアダーニー・ジェネラル 検事總長となり、時の寵兒ジョージ・ヴィリアズ卿にとり入つて、ロード・チャンスラー 官ととんとん拍子に出世していつた。しかしその僅か三年の後一六二二 國墨尙書、大法

一年には瀆職罪をもつて議會の彈劾をうけ、すべての榮職を去るのみならず、一時はロンドン塔に幽閉される身となりはてた。その後寛大な處置がとられるようになつたけれども、ふたたび官職につくことはできなかつた。ゴランペリーに隱退して餘生を著述と研究とにささげた。彼の死んだのは一六二六年四月九日であつた。その死の原因についてはベイコンにふさわしい話がつたえられている。その年の三月、ロンドンの郊外を散歩していたとき降雪にあい、雪が腐敗を防ぐか否かを實驗するために側の農家から鶏をもとめて、この腸をのぞき、雪をつめることをやつたが、その後で風を引き、それが原因となつたという。

ジェームズ王が即位して間もなく、ベイコンが新しい地位を求めて待機していた頃に彼は『學問の進歩』を書いた。これは當時の學問の現状をしらべて、その缺點を指摘し、誤れる方法による時學問は大きな損失をまねくが、正しい方法をもつてするときには人類の福祉に大いに資するものなることを説いたものである。この大著がまず英語で書かれたことも注目すべきことであつた。これはベイコンが生涯夢みていた學問の「大革命」の一部をなす著述であつた。ベイコンが検事次長であつた一六〇七年頃にラテン語で『論考と判断 Cogitata

of Vison』というのを書いているが、ここには後の『ノーヴァム・オルガナム』となる歸納法が説かれている。過去の理論にとられることなく、子供のような無垢な、かたよらない眼をもつて個々の特殊な現象をみつめ、これらの観察や実験の結果を整理して、この特殊から漸次一般へと近づいて行く。その間に飛躍があつてはならないといつた考え方であつた。一六〇八年七月頃の覺書にわれわれはふたたびサロモン學院の構想を見出す。そこで彼は自然の驚異を示す歴史とあらゆる観察と実験の歴史の必要を説き、その完成のためには才能と筆とを支配しうるような地位にかなければならぬことを思い、「才能と筆とを支配しうる地位を考えること。ウインチスター、イートン、ウェストミンスター、特にケインブリッジのトリニティー、聖ジョンズ、オックスフォードのモードリンなど」と彼は書いている。そして次のような學寮の計畫を描いた。

「上記の二歴史編集の研究用として四名に年金をあたえる。發明家のためのコレヂの設立。過去の發明家の肖像をおくギャラリー二つ、未來の發明家のための餘地も残しておく。

圖書館と機械室。

多くの人々の協力と参加とをうながすために一般的な要素を含む秩序と訓練の件。その研究および探求の規則および規定の件。

旅行手當、實驗手當。外國の諸大學との情報交換。

秘匿、傳承、發表に關する方法および規定の件。

價值なき發明を一定期間除去排除する件。同じく發明にたいする榮譽、褒賞の件。

洞穴、爐、日光に曝らすためのテラス、あらゆる種類の作業室。」

ベイコンはこの頃から學問研究に都合のよい地位を望んでいたことがわかる。彼の没落後、官界に望みのなくなつた頃に、イートン學寮の學長の地位があつたことがあり、彼はその地位につきたいと思つたけれども成就しないことがあつた。彼は死にいたるまで、こういう學問の府の建設を夢みていた。その遺言状にも遺産の一部をもつてケインブリッジ、オックスフォードに博物學關係の講座をもうけるようにと書いた。

一六〇九年ベイコンは『哲學の反駁 Redargutio Philosophiarum』という断片のなかにサ

ロモン學院の長老をおもわせる一人物を登場させた。ペイコンはフランスの友人と哲學上の問題について語りあつていたときに最近フランスで行われたある會議の話をきいた。それは五十名ばかりの著名な哲學者や僧侶、貴族のあつまりであつたが、やがてその會合の場へ「靜かな落ち着いた顔付の人（ただし常に隣みをたれるといつた容貌をおびていた）」がはいつてきて、演壇とか説教壇などにはあがらずに聴衆と同じ高さの席に腰をおろして演説をはじめた。その演説は從來の權威を破壊して、人智を擴大すべきことを説いたものであつた。サロモン學院の長老も常に隣みをたれるごとき容貌をしており、上段の間といつたところには坐すことなく、話し相手と同じ席に坐していた。長老の姿はすでにここに具體的な型をとりはじめていたとみることができらるであらう。

一六二〇年に長い準備をへて『ノーヴァム・オルガナム』が出版された。その第一巻には彼の歸納的方法が明確に説明され、第二巻においてその實例が示される。これを讀んでも明らかなごとく彼の歸納的方法は近世哲學および科學の偉大な武器ではあつたが、これだけでは效果の少いことがわかる。彼が驚くほどの無智を示している數學、これこそデカルト、ニ

ユートンが用いて近代をつくりあげた指導精神であつた。ここにわれわれはペイコンの限界をみる。この限界は後に論ずることく『ニュ・アトランチス』でも彼の限界として作用した。ローリーの序文にも述べているようにペイコンは博物學の完成のために『ニュ・アトランチス』を未完のままに放棄した。こうした行動も彼のこの限界が生んだものにほかならない。

この架空の國の構想がペイコンの長い生涯にわたる思索のこりかたまつたものであることは以上に述べた通りであるが、なおこのほかに彼の空想力を刺戟した二人の人物をあげなければならぬ。それはプラトンとトーマス・モアである。プラトンの『共和國』がペイコンのユートピア創造に大きな貢獻をしたことはもはや論をまたぬとおもわれるが、アトランチスという名からなお『ティマイオス』と『クリティアス』の二篇がわれわれの注意をうながす。『ティマイオス』でソクラテスはギリシヤの七賢人の一人であるソロンから傳えられた古代アテネの物語をきく。その古代アテネの物語はエジプトの僧がソロンに語つたのであつた。當時アテネはその軍備において諸都市に冠たる國家で、その法律機構は『共和國』に

のべられているような理想的な國であつた。しかしなかでも優れた業績はアトランチスの侵入を阻止したことにある。エジプトの僧は次のようにソロンに語つた。

「わたくしどもの國の歴史にはあなたのお國の多くの偉大なすばらしい事業が記録されております。しかし中でも特にその偉大なこと武勇の點で他に絶した一つの事業がございます。わたくしどもの記録によりますと、ある強大な國がヨーロッパおよびアジアの全土に不遜な侵入をくわだてましたのを、あなたさまのお國が阻止されたのでした。その軍隊は大西洋の方からまいりました。と申しますのは當時大西洋は船で通ることができたのでございます。あなた方がヘラクレスの柱とよんでいらつしやる海峡の正面に一つの島がございまして、その島はリビアとアジアとを一緒にしたのよりも大きなものでした。ここから他の島々を通つてゆくと、そのむこうに眞の意味の大洋があり、それをかこんで反対側に大陸があるのでございます。つまりこのヘラクレスの海峡の内側の地中海は狭い入口をもつた港湾のようなもので、そのむこう側にある海こそ眞の海で、それをかこむ國が本當の意味で大陸と呼ばれるのでございます。さてこのアトランチスの島には強大な驚異すべき帝國がございまして、こ

の全島とその他の島々を支配し、その支配は大陸の一部にまで及び、ヘラクレスの柱の内部分ではエジプト近くまでのリビア、チレニア近くまでのヨーロッパを支配しておりました。この危大な強國は國力を一つにして今やわたくしどもの國とあなたの御國と海峡の内側の國土をすべて一撃のもとに征服しようとしてました。當時、ソロンよ、あなたの御國はその武勇の優秀さにおいて全人類に輝きわたつておりました。その勇氣といい、武技といい、第一であつて、ヘレネ人の頭でございました。他の國々が脱落して、御國が孤立のやむなきに到つたときにも、非常な困難をたえしのんで、侵入軍を打破り、これに打勝ちまして、まだ征服されなかつた國民に奴隸の悲境を味あわさず、ヘラクレス海峡の内側の國々を解放いたしました。しかしこの後で激しい地震と洪水とがありまして、一日一夜の雨のうちにあなた方の勇敢な人々は一國となつて地中に没し、アトランチスの島も同じく消えて、海中に沈みました。こういふわけで今日その邊の海は航行することができないのでございます。途上に多くの浅い泥沼が澤山あるからで、これは沈んだ島のためにできたのでございます」(ジョウエットの英譯より重譯)

このエジプト僧のアトランチス侵入の物語は、ベイコンによつても受けつがれた。しかしベイコンはこれに少しく變更を加えて、大地震、大洪水による滅亡ではなく、この地方だけを襲つた部分的な洪水のためとし、それも山岳の住民は生きのこつたようにした。しかしベイコンが述べたアトランチスの成立とその帝國の美觀は『クリティアス』から教えられたらしい。このプラトンの斷片の語るところでは、ボサイドン（ベイコンはローマ名をとつてネプチューンとした）がアトランチスの原住民の娘クレイトと戀におち、彼女をまもるために「その住まわりに丘をめぐらし、海と陸との帯をもつてかこんだ。かくて何人もこの島に行くことはできなくなつた」といい、この神の子達がこの島に住むようになったが、その長男はアトラスといい、その名にちなんでこの島と大洋の名ができたという。アトラスの子孫は次第に強大な帝國をつくりあげ、その宮殿の美觀について、「代々の王は力のかぎり、前王をしのがんとその裝飾に心をかなむけたから、ついにはその建物は規模といい、美觀といい、人眼を驚ろかすものとなつた」という。城の中央にはボサイドンの神殿があり、金・銀・象牙・オリカルクム（古代人が珍重した礦物、プラトンも今は名のみ残るといつている）などで飾られた未開の壯麗さといつたものがあり、その中に黄金の像が安置されている。都市には住民が多く、運河は縦横にはしり、港には船がみちていた。

ベイコンはこのアトランチスを今日のアメリカと同一のものとした。この故に彼はアトランチスを海中に没せしめず、部分的な洪水の來襲にとどめたのであろう。そして彼の理想郷であるニュ・アトランチスはこれよりも奥にある、すなわち太平洋上の一島とした。プラトンのアトランチスが今日のアメリカと同一であるとの考はベイコンの獨創ではなく、すでにフランシスコ・ロベズ・デ・ゴマラなるものが一五五二年サラゴサで出版した『印度史』に述べており、この書物は一五五五年にリチャード・イーデンにより英譯された。その一節に「哲學者のプラトンは『ティマイオス』および『クリティアス』のなかで、昔アフリカの外の大西洋にアフリカとアジアとを合せたのよりも大きなアトランティドという島があつたと書いてある。そしてこの島はその當時から大きな大陸で、その島の王はアフリカとヨーロッパの大きな部分を支配していたという。しかしある大地震と暴風雨とのためにこの島はしずみ、人々はおぼれてしまつた。この島のしずんだところに多くの泥がのこり、そのため

に大西洋は航行不能となつたという。これは架空の物語にすぎないと考える人もあるが、また眞實の歴史だとする人も澤山いる……しかし今日ではわれわれはもはやアトランティドの島について疑惑をいだく理由はない。西インド諸島の発見と征服とによつてプラトンがこの島について述べたことが一切明瞭になつたからである。メキシコでも今日は大^{アトランティック}西洋の^{アトランティック}ことをアトラントとよんでいるが、すでになくなつたこの島の名を思い出させる言葉である。

同じく西印度諸島もプラトンの語つた國か、その殘物であるといえよう」
このほかにも二三、アメリカとアトランチスとが同一であるという説は出ているので、おそらくベイコンはこれらの書物を讀んでいたに相違ない。

發明発見を奨励して人智を擴大し、「人間帝國」の建設をめざすサロモン學院の構想は既に述べたごとくベイコンが若い頃からいだいていた夢を紙上に實現したものであつて、彼の獨創ともいえるであらう。ただここにベイコンにいくらかの暗示をあたえたと思われる一事がある。それは一六〇三年にローマにできたリンチエイのアカデミーであつて、これは物理学と數學の研究を目的とした。このアカデミーに關する叙述が一六二四年に出版になつてい

るので、ベイコンの眼にふれたかもしれない。なお一六一六年にエドモンド・ポールトンなるものが英國のアカデミー設立を提案し、「ゴジエームズ王のアカデミー、榮譽の殿堂」と名づけようといつたことがある。これなどもベイコンを幾分刺戟したであらう。しかしサロモン學院の構想はベイコンがその創造の權利を主張するに十分なほど彼の生涯をつらぬく思想の具體化であることをわれわれは認めなければならない。

この理想國の社會制度についてはベイコンはモアにおうところが大であつたと思われる。外國人入國禁止を中心とするこの國の情勢は『ユートウピア』のなかで述べられているポリロス人の國と類似している。

「ポリロス人の國土は廣大で、そこには巧みに人心の機微を把んだ善政がしかれてゐます。人民達は、ベルシャの大王に年貢を納める義務を除けば、階級の如何を問わずすべて自由で、完全な自治を享有してゐます。しかし、海岸からずつと奥地に引込んでゐて、周圍は峻嶒な山嶽で圍まれて居り、土地が肥沃豊饒で結構自給自足ができるところから、彼らはわざわざ外國まで出かける必要もないし、また外國の者もやつてきません。つまり彼らはこの國古來

の傳統に従つて、領土の擴張を行ふ意志を毛頭持ちません。既有的領土は周圍の重疊たる山嶽のおかげで難攻不落の要塞をなして居り、支配者であるベルシャ王に年々貢物を獻ずるおかげで、戰爭に捲込まれる心配もありません。かういふわけで、彼らの生活は、派手ではないが實に安泰そのものであります。名聲赫々とはいへないが、實に幸福で祝福されたものといふべきであります。恐らく、彼らの國名さへも、隣國人を除けば、誰も知らないのではな

いかと思ひます」(平井正穂氏譯)

ベイコンが作つた言葉であるターサンとかタランタンなどもモアのトラニボーレとかジフオグランドにならつてつくつたものであらう。ベイコンがはつきりとモアを頭において、これが改良を行うと自負している一風習がある。それは結婚に關する風習である。

「次に、結婚の相手、つまり妻や夫を選ぶ場合のことであるが、我々の眼から見ると實に馬鹿らしいとも滑稽とも見える、ある一つの習慣が今でも眞面目に、いや嚴肅に行はれてゐる。つまり結婚に當つてまづ謹嚴貞淑な徳望家の夫人が當の婦人を(處女であらうと未亡人であらうと構はない)裸體にしてその求婚者に見せるといふこと、更にまた、求婚者の方は求婚

者の方で、思慮深い有徳の長者の命によつて自分の裸體を相手の婦人に見せるといふこと、これである」

この風習はもちろん肉體上の缺陷を知らずして結婚し、その破綻をまねくのを防ぐにあつた。ベイコンもこの風習を『ニュー・アトランチス』で採用したが、ただ本人同志が裸體をみるのではなく、友人が代つてみることになつてゐる。ベイコンはこの變更を大した改善のようについているが、われわれにはそれほどにはみえず、ただモアの先例が強くわれわれの心をうばうだけである。

ベイコンがモアの『ユートウピア』を始終頭にうかべて筆をすすめていたことは疑いの餘地はない。それにもかかわらず兩者を讀みくらべるときにわれわれは大きな相違に氣がつく。それは作者の根柢的な精神と結びついてゐる。ベイコンは非常に外觀の裝飾を重んずる。それはサロモン學院の長老がベンサレムの都に入るときにのみただけでもうなずかれるであらう。金銀をちりばめた衣装、寶石の輝き、すべてが強い東洋的色彩にみちみちてゐる。かういふ外觀への關心はモアにはみられない。黄金や寶石などにたいしてモアは明らかに輕

悔の態度をとつている。

「金や銀で大體彼らは何をつくるかといへば、實に便器である、汚穢極まる雑多な器具である（これらは共同の會館に於ても、各個人の家庭に於ても同じやうに用ゐられてゐる）。さらに奴隷を縛るのに用ゐる足枷、手枷の鎖である。そして最後に、罪を犯したため皆に蔑まれてゐる人間が身につける耳飾りであり、指環であり、首環であり、さては頭にまく鉢巻である」

であるから、ユートウピア人がサロモン學院の長老の行列をみたならば、あのアネモリアの使節の行列の場合のようにこれにたいして少しも尊敬の念をいだくことはなかつたであらう。わたくしはここにベイコンの肉體に集つてゐる中世主義の残渣をまざまざとみるような感じがする。科學研究、哲學研究といった理性の面では彼は確かに近代を形成する進歩的態度を示したが、社會制度や政治機構の面においては彼は驚くほどの保守主義と貴族主義とを露呈している。モアの『ユートウピア』でもカンパネラの『太陽の都』でも、またプラトンの『共和國』でも私有財産は否定された。しかるに『ニュ・アトランチス』では私有財産

が否定された形勢はみられない。しかし私有財産の問題を突かずしてはユートウピア文學の成立はありえない。われわれを常に悩ましてやまない私有財産という亡靈からユートウピア文學は誕生しているのだといつても極論ではあるまい。ベイコンが『ニュ・アトランチス』の筆を途中で放棄しなければならなかつた一原因がその邊にある。彼は社會制度、政治機構の面で彼の理想を追求することをさしひかえた。それを行うには彼はあまりに世俗にたいして妥協的であつた。彼の世間にたいする妥協的態度は職官運動に終始した彼の政界生活をみても明らかであらう。

「たしかに少々愚かしいところがあることと、あまりに正直すぎないということ、この二つほど幸運な性質はない」

「すべてすぐれた美は、つりあいにおいて幾らか異常な點をもつてゐる」

「本當のことをいうと、こういふ末世では徳高い人よりも活動的な人の方が役にたつ」

以上は思い出すままに彼の『隨筆集』から引いたものである。そこにはたしかにすぐれた世俗にたいする叡智がある。現實を的確に把握してあやまたないこのリアリズムの精神は近

代を形成するに必要な要素であつた。こういう世間にたいする知慧がなくては複雑な資本主義社會のなかに暮してゆくことは困難であらう。ベイコンは確かに中世の人々が現實をみる眼をおおわれていたのを覺醒させた。それが哲學研究の面では歸納法の論理となり科學の面では實驗や觀察の方法となり、『隨筆集』における世俗的叢智ともなつてゐる。しかしそれだけでは近代は形成されなかつた。哲學においてはデカルトが必要であつたし、科學においてはニュートンが必要であつた。近代社會を形成する力としては、單なるリアリズムをのりこえて行くアイディアリズムが必要であつた。しかしベイコンはあくまでもリアリストに終つて、ついにアイディアリストにはならなかつた。彼は現實の社會の醜惡を知つてゐた。しかしこの醜惡をいかにして除去して理想の社會を建設すべきかは追求しなかつた。彼はただ世間知といつたもので社會惡をさばいていつた。そしてついにその社會惡の陷穽におちこんでしまつた。これが彼の實生活における姿態であつた。ユートピア物語を書いても同じく彼は新しい社會の建設という方向に筆は潑刺とすすむことはなかつた。ローリーの序文にいうごとく、彼は博物學の蒐集といつたりリアリストの常道にそれてしまつたのである。

傳記作者のアポットは「ニュー・アトランチスの市民の主な特徴は秩序整然としてゐることである」といつてゐる。いかにもわれわれは全篇に秩序の觀念のゆきわたつてゐるのを見のがすことはできない。これは現實の混亂した社會、あのエリザベス時代前後の英國の亂世にたいする作者の反感のあらわれであらう。しかし前を向いてゐる秩序もあれば、後ろ向きの秩序もある。ベイコンの態度がその後者であることは既に述べた通りだ。彼はそれを前へむいた秩序にまでもつてゆく勇氣はなかつた。ベイコン全集の編者スベディングは「サロモン學院の敘述は彼が生涯いだいてゐた幻の敘述である——われわれが屈服させられてゐる自然の條件から解きはなされた理想の世界の幻ではなく、われわれが義務をつとめさえするならば實現できるかもしれないわれわれ自身の世界の幻である、この地上にいつかは現實にみることができる」と彼の信じてゐた事態の幻である」といつてゐる。この言葉は『ニュー・アトランチス』全篇の特徴でありまた同時に限界をも物語つてゐる。海をくぐり、空を飛ぶ等々のサロモン學院の發明發見の数々は今日の科學が實現してゐるのであつて、ここに語られてゐるものの多くはベイコンが信じた通り實現不可能とは思われぬものばかりである。それほ

どに現實から高く飛躍しているものは存在しない。だが、そこにユートピア文學としてみるときにもものたりぬあるものが感ぜられる。彼が社會、政治の面であくまでも理想を追求していつたならば、その現實の惡を徹底的にほりさげていつたならば、そのユートピアはかくまでも現實に即したところにとどまることはなく、ユートピアのユートピアたる面が強く浮き出てくることであろう。ベイコンはついにリアリストたるにとどまつた。彼は地上を離れて空中を飛ぶことはできなかつた。アイディアリズムに裏打されないリアリズムは裏リアリズムであつて、それは不毛のリアリズムにすぎない。そこからは何ものも生れないであらう。

モアの『ユートピア』と比較することによつてわたくしはベイコンの限界にふれた積りである。これはいうまでもなく『ニュー・アトランチス』一篇だけにみられることではなく、各方面においてうかがえる。實生活における彼の一種のマキアヴェリズム、不誠實との非難をうけるにいたつたあの權謀術策も理想をうしなつたりリアリストのそれであろう。近代を形成するに缺くべからざる指導精神となつた數學にたいする彼の無知は哲學や科學の領域にお

いて彼の限界として作用した。これまた彼のリアリズムの偏向ではあるまいか。宗教の問題においてベイコンは神の問題は信仰の領域であつて、理性の容喙をゆるさざるものとして、この二つの領域を峻別していることは『學問の進歩』などに繰返し語られているところで、彼の宗教意識の根柢をなすことは本稿のはじめでも觸れておいた。しかし近代社會における宗教の焦點は神の問題を理性をもつて攻略しようとするところにあるのではあるまいか。その成否の別は問題ではない。ただこの闘争をへないかぎり宗教意識は中世の衣を脱することのできなかつたであらう。近代の宗教問題はすべてこの闘争を中心として展開している。しかるにベイコンはこの問題をことさらに迴避した感がないでもない。『ニュー・アトランチス』を支配する宗教的雰圍氣は近代における宗教問題の重點をいまだ把えていない者の態度である。こういった諸々のベイコンの限界は、肉體を最もすばやく露出してみせる文學作品である『ニュー・アトランチス』に明瞭にうかがえることは論をまたない。

『ニュー・アトランチス』について語るべきことは大體語りつくしたとおもう。ベイコンの女

學的技術についてここに述べる必要はあるまい。何らのまわりくどい書出しもなく、いきなり讀者を事件の中心に引きこんでゆく手法などをみても作家としてのベイコンの力量は相當なものである。こういう方面についてはわたくしの拙い譯からも讀者は十分にうるどころがあるであろう。次に『ニュー・アトランチス』があなた後世への影響について述べ、この解説をおえることとする。

ベイコンはジェームズ王の心をうごかして、英國にサロモン學院のごとき學寮を立てさせようと思いつつこの作品を書いたのであろうか。暗々のうちにそういう氣持は幾分はあつたかもしれない。しかしこれが書かれたのが王即位後二十年であり、これまでの王の行動からみても、そういう期待はもてなかつたに相違ない。しかもこれが出版されたのは王の死後であつて、次の王の心を動かした様子もなかつた。しかしこの作品は後世に二つの大きな影響をあたえた。それは英國ロイヤル・ソサエティ學士院の設立とフランスの百科全書の編集であつた。このことについて述べる前にベイコンの死んだすぐ後にあらわれて彼の夢をふたたび人々の記憶にあらたにした二人物がいた。

一人はベイコンに使われていたトーマス・ブッシュェルという男であつた。自分はベイコンから廢鐵を生かす方法を教えられている、これを利用して富を得、サロモン學院の理想を實現したいといつたようなことを彼は述べて、議會に廢鐵の權利移讓を請願した。「クリーサスのごとき富をわたくしが自由にできるならば、國民の幸福のために不毛の山に穴をうがつてその岩間にかくされている尨大な寶をほりだすことにその富のすべてを喜んでわたしは賭けるであろう。そしてわたしの負債を拂つた後で、閣下の雄大な御構想のままに、これに應じた設備と基金とをもつサロモン學院を完成して、わたくしの尊敬する師を記念する雄大な記念物としよう」と彼は書いている。しかしこの男は結局ベイコンの名をかりて一偏けしやうとした山師にすぎず、彼の提案も立ち消えとなつてしまつた。

しかしこれよりも眞面目で興味ある提案が詩人および隨筆家として文學史上に名をとどめているエイブラハム・カウリーによつてなされた。『學問の進歩のための提案』という一六六一年に出版された書物である。そこで自分は何もベイコンのサロモン學院を眞似るつもりはない、ただ一市民の建物にも及ばない程度の費用でこれを提案しようと思うのだと言つて

いるが、その詳細を見るとサロモン學院の構想から暗示されたいところが多い。その序文で、自然のうちに探求すべき一切は古代の人々により探求しつくされ、アリストテレスのうちに一切の眞理はあるといつた考に反對し、優れた人々を一堂に集めて、その研究の費用を十分にあたえて指導するならば優れた發明發見がぞくぞくと生れるであろうと述べて、かかるコレヂの設立を提案した。このコレヂのプランをみるとサロモン學院に似た所が多い。

「人類の生活に有用な發明發見をした人々の肖像畫および塑像を飾る遊歩廊。たとえば印刷、大砲、アメリカなど。また最近の解剖學における血液の循環や乳糜管の研究、同様な技術上の諸發見。その肖像の下には短い讃辭をそえる」

「解剖室：：あらゆる藥劑の研究室：：數學研究室：：植物の改良、栽培促進、遲延、保存、合成、變質、着色など植物に關する一切の實驗を主として行ふ植物園：：動物の自然を精細に研究し、その用途を改良するために必要なりと教授の判定したあらゆる種類の動物をいれる檻：：天體觀測のための高塔：：實驗のための地下の深い洞穴」

以上のようなものをカウリーは彼の計畫するコレヂに設立しようとした。また彼は次のよ

うな計畫も提案している。

「二十人の教授のうち四人は常に海外に旅行し、十六人が常に國內に止まる」。

旅行する四人の教授は世界の四つの部分すなわちヨーロッパ、アジア、アフリカ、アメリカに派遣され、少くとも三年間そこに住んで、その地の學問特に自然科學に關係あるあらゆる事態をたえず報告する」

このカウリーの計畫は、『英國學士院史』の著者スプラットの指摘することく、費用がかりすぎることと、教授に教育の義務を負わせるといつた二つの缺點があつた。それでこの計畫は實現されなかつたが、一方、英國の内亂の頃に少數の學者達のささやかな會合から出發した英國學士院ロイヤル・ソサエティがベイコンの夢を實現するようになった。ベイコン傳の著者ニコルは次のように語つてゐる。

「ロンドンに設立された「コレヂオ・オブ・フィロソフイ哲學學寮」(一六四五年)は王政復古の後に「英國學士院」へと發展した(一六六二年)のであるが、これは「ニユ・アトランチス」のサロモン學院の預言的な構想に發している。英國學士院の創立者の一人であるウォリスは、ガリレオとともに

にベイコンの名をその師としてあげている。

またスプラットは『英國學士院史』（一六六七年出版）に次のように書いた。

「今日その緒についたこの企畫のすべてを眞に腦裡に描いた唯一の偉大なる人はベイコン卿である。その著書のあらゆるところに自然科学擁護の優れた議論と、これを促進するに必要な最善の指令とがみられる。そのすべてを卿は優れた技術をもつて飾られているのであるから……この『英國學士院史』の序文には卿の文章をもつてするほかは必要もないように思われるほどである」

『フランスの、ベイコンの哲學』の著者アダムは

「この哲學者の美しい夢であるサロモン學院は、かくしてその死後四十年たらずして實現しはじめた」

と語り、このほかにも例えばイタリーのボロニャに一七一四年設立された學會もベイコンの夢の實現なることを人々は認めていたと述べている。

「ニュ・アトランチス」は英國學士院と海外のこれと同様な學會の設立に大きな貢献をした

が、またそれは十八世紀のフランスの偉大な業績であつた『百科全書』の編集にフランスの學者たちを協力させる力ともなつた。これによつて過去の科學の達成した成果があつめられて、教會と國家の專制への攻撃の火ぶたが切られたのであつた。編集者の一人であるディドロは次のように語つている。

「もしこの仕事にわれわれが成功したとするならば、それは大法官ベイコン卿におうところが大である。卿は、いわば學藝とか科學とかが未だ存在しなかつた時代に、科學と學藝との普遍的事典の計畫を立てられた。この偉大なる天才は、すでに知られたものの歴史を書くことさえ不可能なときに、是非とも學ばねばならぬものの歴史を書かれたのであつた」

ベイコンの文學的作品である『ニュ・アトランチス』には、彼の肉體的な限界を示す多くの鍵が見出されるのであるが、彼が夢に描いた獨創的なサロモン學院の構想は英國學士院とフランス百科全書という偉大なる成果をあげた。これによつて人類の進歩に資すること大であつたことは認めなければならぬであらう。

11683

昭和二十三年四月二十日發行

ニユ・アトランチス 世界古典文庫

定價 二十八圓

譯者 中橋一夫

發行者 東京都中央區京橋三丁目四番地
鈴木三男吉

印刷所 東京都港區南佐久間町一丁目五十三番地
笠井出版印刷社

發行所 東京都中央區京橋三丁目四番地

發行所

株式會社 日本評論社

出協會員A一四〇〇八號
電話京橋(56)六一九一三番
東京一六番

青木製本所製本

世界古典文庫 既刊近刊

オウエン	五位田・五島	自叙傳 (上・下)	1-2
ハネ	井坂越次郎	アッタ・トル	3
杉	杉 捷夫	ダランベールの夢	4
トウ	玉野井芳郎	通貨原理の研究	5
ウエ	中野 正	イギリスとアメリカ (一-三)	6-8
ベ	鈴木 一郎	リカアド價值論の批判	9
チ	近藤康男	孤 立 國 (一-二)	10-11
ゲ	金子 幸彦	過去と思索 (以下續刊)	12-23
ホ	石川 道雄	ちび助ツアツヒエス	24
フ	井上 正蔵	フライリヒラート詩抄	52
ホ	柏 龍	カチオデカメロン (一-六)	26-31
コ	杉浦 明平	白黒年代記	32
オ	石山 正三	收入ある地位	33
サ	大塚 幸男	ジュネーヴ人の手紙 他三篇	34
ホ	鈴木 鴻一郎	労働擁護論	35
ベ	永田 寛一	上なき判官これ天子	36
フ	石山 正三	現實の美的關係	37
サ	高木 鶴哉	産業者の政治的問答	38
キ	安土 正夫	ヨーロッパ文明史 (上・下)	39-40
ク	吉原 武安	寓 話 (上・下)	41-42
デ	平田 島田	カデバフィールド	43-46
ガ	川 西 良三	イギリス便り	47

終

